

北関東の山無し県

茨城のクライマー集団の会報

R&V 21号

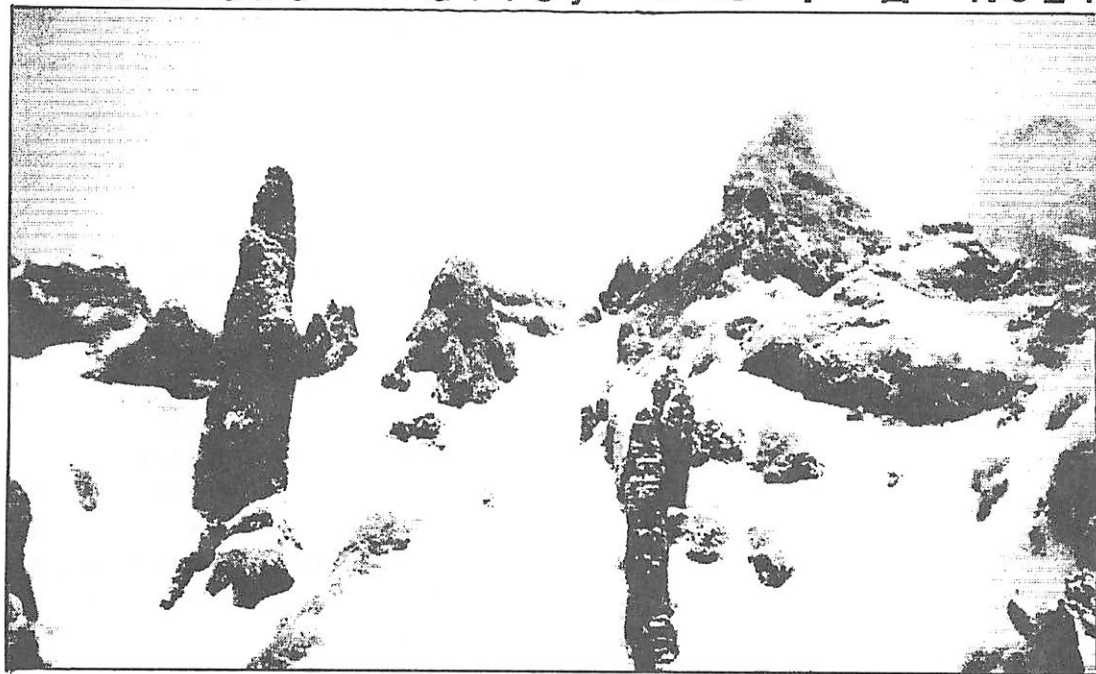
1996年 4月～6月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

R o c k a n d V a i l e y 9 6 年 春 N o 2 1



仙法志ローソク岩（左）と南稜大槍（右）

《photo by motozu》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集

アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

夢は大きく50cmオーバー

小生は田舎生まれの田舎育ちだから幼少の頃から魚取りはしていた。魚取りの方法としては、釣り、掬い、かっぱらい、ドジョウ掘り、下げ針、などであった。掬いとは網で掬うこと。かっぱらいとは人様のものを盗むことではない。小川を2カ所堰止め、その間の水をバケツで掻き出し、そこにいる魚を一網打尽にすること。つまりバケツで水をかっぱらうのでその名前がついた。下げ針とはドバミズかドジョウを餌にして、夕方仕掛け、翌日早朝上げに行くというものである。獲物は釣りでは鮎かペラ（たなご）かパカチョ（はぜ）。掬いではメダカ。かっぱらいはナマズ、ウナギ、ライギョ、ギューバチ（ひれに針を持っていた刺されるとかなり痛い）などなんでも捕れた。ドジョウ掘りは水の無い田圃にあるドジョウの呼吸穴を見つけて掘り出すのである。普通の混じって、たまにどでかいドジョウが捕れた。これを万年ドッキョ（万年ドジョウの意）といった。下げ針ではウナギかナマズだった。しかし、獲物のサイズは精々30cm止まりであった。

毎年夏休みには下妻の親戚に行った。すぐそば

には鬼怒川があった。舟が往来するような大きな河川は小生の田舎には無いので物珍しく、一日中、川で遊んでいた。ある時近所の子供が、置き針（下げ針のこと）を掛けると1m位の魚が捕れるという話をしていた。小生にはとても信じられなかった。でも当時は夜打ちといってカンテラを点けて鮎を捕る舟が何艘も出ており、大きな鮎が捕れるのを見ていたので一度置き針をやってみたいと思っていた。下げ針は篠竹一本に針一本なのだが、置き針はメインロープに針付き支糸を20本位出すのである。よく海の漁師さんがやっている、はえなわ漁と同じだ。数年後、ついに小生は置き針をやる機会を得た。見様見真似で漁具を作ったのだ。結果は本当に50cmも60cmもあるナマズ等が捕れたのである。大きなものはタライの直径より大きく、これをゴセナマズ（5歳ナマズの意）といった。この時小生は小さな川には小さな魚、大きな魚は大きな川にしか育たないんだと思うようになった。

登山をするようになって山岳雑誌を読んでいると、上州武尊山の沢に入ったパーティが、イワナ

という魚を手掴みにした、という記録が目についた。それもゴジャゴジャいて面白い様に捕れ、大きさも30cm以上は裕にあるとのことだった。小生は“本当かいな”と疑った。あんな山の中の小さな沢に、そんな大きな魚がいるとは信じられなかった。だいたいそんな所に魚が住んでいるのかいとも思った。沢登りに行くことはあったが、丹沢辺りなので釣人に会うこともなかった。溪流釣りの本を買ってきて少しは勉強をした。なるほどイワナという魚はかなり大きくなるらしい。幻の溪流魚と言われているようだ。釣るのはとても難しらしく、私にできることではないと思えた。

穂高合宿のアプローチで横尾付近を通過中、釣り人を見かけた。イワナを釣っているのだと言う（現在は禁漁）。水中をみると大きなイワナが悠々と泳いでいるではないか。あまりにも精悍なその雄姿に感動し、俺も釣ってみたいという気持ちが湧いてくるのだった。

明星山南壁通いに精を出しているところ、登攀同志会の八木下氏が登攀の合間に小滝川で釣りをしていた。聞くとイワナが釣れるんだという。しかし、釣れた様子はなかった。次回には糸針餌を持

っていった。しかし竿は木の枝等現地調達（今思えば考えが甘かった）。当然釣れる訳がなくボウズ。これが小生のイワナ釣り初トライである。

ある時、ACCJ東京の水島さんと大菩薩の某沢に行った。猿橋駅前の懸賞付自動販売機でジュースを買ったところ、なんと大当たり。フムフムこれは幸先がいいわいと入渓する。某沢は大菩薩では峡谷で知られる沢だったせいか、魚影は濃かったもののボウズに終わった。どうせイワナは素人の我々に釣れる魚ではないと思っていたから悔しいとも思わなかった。水島さんはビバーク中、腹痛を起こし苦しんだので、イワナが釣れなくて良かったような気もした。イワナにあたったと言われなくて。しかし、しっかりと沢は完登した。

一時期、裏女峰の沢に興味を持ち何回か通ったが、いつも日帰りなので釣りをしている余裕はなかった。でもこの頃は釣り用具をザックの中にしのばせていた。深沢に入ったとき、中流の伏流部を過ぎた所で休憩した。小さな落ち込みに、いたずら半分でちょっと竿を出してみた。するとググッと手応えがあり釣れたのである。24~5cmのが1尾だけだったが早速記念写真を撮り、塩を

まぶして家に持ち帰った。これが小生のイワナ初ヒットである。イワナの存在を知ってから既に10数年が経過していた。

その後、川内山塊の某沢に行くことになった。某沢は登られてはいるらしいが、簡単な説明があるだけで遡行図もない。ゴルジュは相当なものと思われ、その水線突破は困難が予想された。ボルトやらハーケンやら、なんか知らんけどザックの中は鉄屑ばかりであった。でも釣り用具は忘れず入っていた。最近この沢に人は入っていないだろうからイワナは居るに違いないと考えたからである。ゴルジュは我々の期待を裏切らず素晴らしいものであったが、それよりも期待を裏切らず300%で返してくれたのがこのイワナ達であった。ポイントなど関係なし。どこにでもイワナはいた。餌が水面に落ちるかいなやパクリ、もうアタリなど全然関係なかった。一つの釜から何尾も釣れた。浅瀬にいるイワナの口元に餌を流すとパクリとくるのだからいくらでも釣れるのだ。サイズも尺上ばかりで最高は36cmだった。これだけ釣れると人間て贅沢なもので、飽きてしまうのである。そうか上州武尊山の記録はこの状態だったんだ。釣りに飽きた我々は手掴みに挑戦した（鯉河先生の辺りでは、手掴みのことを標準語でテヅラミと

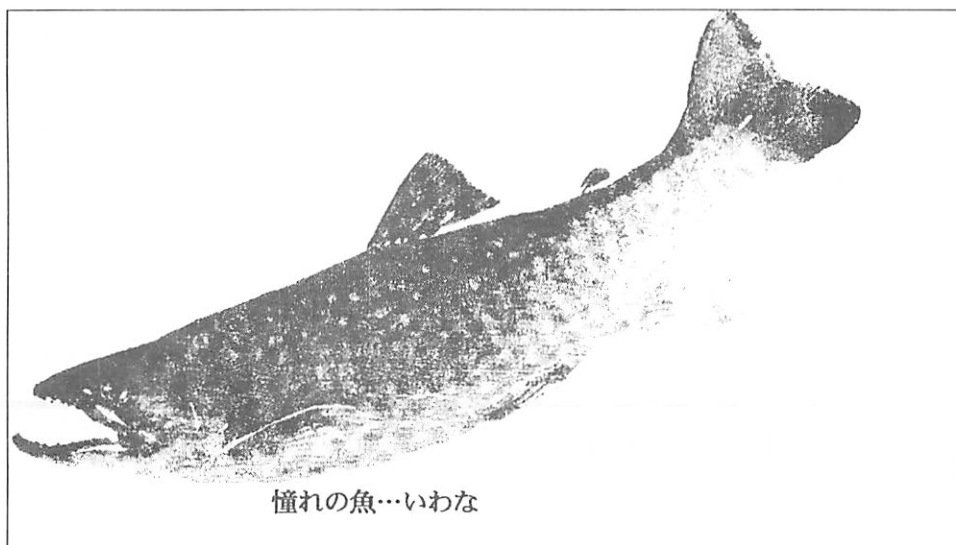
言うらしい。標準語ってなんか汚らしいと思いませんか？小生は毛ジラミをイメージしてしまうよ。穴のことをメドというらしい。穴の中にイワナが逃げると“そこのメドん中だ、早くテヅラミしろ”と怒鳴っていた。（俺は茨城弁で本当にえかったよ、ハイ）。しかし、純情なイワナ達もこれには抵抗を示し、捕獲することは果たせなかった。この状態を川内では3度ほど経験した。

今年になって小生はまだ一尾も上げていない。短時間なれど竿はちょこちょこ出してはいるのだが。所詮、釣り技術など全然無い小生が釣れる所といったら限られてしまう。川内の某沢の快感が忘れられず、今はいつでもザックの中には竿が入っているのである。

神様仏様イエス様お願いします。今年に、どうぞもう一度だけでいいですから川内の快感を味わさせて下さい。けして釣れ過ぎて飽きたなどとは申しません。徹底的に釣りまくります。そして40cmを二本と50cmを一本是非ね。

P S . 何？川内の某沢って何処だって？……。や～だよ、死んでも教えね～よ。

（本図一統）



憧れの魚…いわな

《目次》

1996年 春号4月～6月 ACC-J 茨城

巻頭言《夢は大きく50cmオーバー》	・・・	1
集会報告	・・・	4
山行報告	・・・	5
禿岳ダイレクト尾根	・・・	6
雪訓パート1、パート2	・・・	8
不帰I峰尾根	・・・	9
立山(タンボ沢)春スキー	・・・	11
ヒマラヤ(クーンブ山群)トレッキング	・・・	13
遠くの山シリーズ第一弾(利尻山南稜)	・・・	27
利尻春合宿(利尻山東稜)	・・・	32
鳥海山山スキー	・・・	34
御神楽岳・水晶尾根	・・・	36
岳連救助訓練	・・・	37
叶津川・赤崩沢	・・・	38
岳連岩登り講習会	・・・	39
和名倉沢	・・・	40
荒沢岳・前衛スラブ	・・・	41
荒沢岳・風穴スラブ	・・・	42
檜々谷大スラブ	・・・	43
谷川岳・一の倉沢・ダイレクトカンテ	・・・	45
富士山《高所訓練》	・・・	47
OBの近況報告	・・・	47
友好団体の月報・会報・その他紹介	・・・	49
編集後記	・・・	51

表紙絵…クワンデとナムチェバザール

by ... J. Nami

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 4 月 】-----

4 月 1 0 日

出席者 本図、古山、新美、告、菊池、笹平、生井、坂本（昭）

4 月 2 4 日

出席者 本図、紺野、新美、古山、笹平、今井、大崎、沢田

-----【 5 月 】-----

5 月 8 日

出席者 本図、鯉河、今村、古山、今井、笹平、新美、菊池、大崎、木村、告

5 月 2 2 日

出席者 本図、笹沢、新美、前田、古山、今井、笹平、大崎、紺野、今村

-----【 6 月 】-----

6 月 5 日

出席者 本図、古山、今井、紺野、新美、大崎、笹沢、坂本（昭）、菊池、沢田

6 月 1 9 日

出席者 本図、紺野、今村、古山、今井、新美、菊池、笹平

山行報告

《1996年 4月～6月》

【4月】

4月	6日	岩トレ・古賀志山	L古山、新美、紺野
4月	7日	禿岳	L古山、本図、紺野
4月	13日	雪訓・谷川岳指導センター裏	L古山、澤田、新美
4月	20日	雪訓・谷川岳マチガ沢	L古山、紺野
4月27～29日		不帰1峰尾根	L古山、笹平
4月	28日	立山・タンボ沢山スキー	L本図、菊池
4月27～5月5日		ヒマラヤトレッキング	生井

【5月】

5月	2～6日	利尻山・南稜《春山合宿》	L古山、本図、告
5月	2～6日	利尻山・東稜《春山合宿》	L名雪、澤田、紺野
5月	3日	鳥海山・山スキー	中居
5月	12日	岩トレ・御岩山	L本図、新美、大崎
5月	19日	御神楽岳・水晶尾根	L古山、本図、告
5月	25日	岳連救助訓練	古山、今井、坂本、笹平
5月25～26日		会津・叶津川・赤崩沢	L本図、菊池、他11名
5月	26日	岳連岩登り講習会	今村
5月	26日	岳連準指導員受験	古山

【6月】

6月	2日	和名倉沢	L古山、本図、紺野、新美
6月	9日	荒沢岳・風穴スラブ	L古山、坂本、紺野
6月	9日	荒沢岳・前衛スラブ	L本図、笹沢
6月	16日	檜又谷大スラブ	L本図、新美
6月	16日	谷川岳一ノ倉沢ダイレクトカンテ	L古山、中居
6月	23日	日光・白根山	古山
6月26～27日		富士山《高所訓練》	今井
6月29～30日		岩トレ・ツツラ岩《会山行》	L古山、澤田、新美、今村
			30日のみ⇒本図、菊池、鯉河、木村、告

禿岳ダイレクト尾根

1996. 4. 8

パーティ L 古山正文、本図一統、紺野哲雄

宮城鬼首までは非常に遠い。そこから少し行けば秋田県である。けれども、本図さんのデリカスターワゴンをいたわりつつ、アクセル全開ベタ踏みで、常磐道―東北道を飛ばし、鬼首リゾートのゴルフクラブには、土浦から4時間半程で着いた。鬼首に着く前に、月明りに映える美しい尾根が見えた。あの尾根が目的のそれらしい。この尾根は、本図さんが鬼首スキー場にスキーに来たとき、スキー場から見つけた尾根で、日本登山大系には写真だけが載っていて、ルートの説明がないのである。普通はここで諦めるのだが、本図さんは、こんな事ぐらいではへこたれないのである。浦和浪漫に問い合わせ、きっちりと資料を収集していたのであった。あやかりたいものだ。

今回の山行は、紺野君の雪上トレーニングというもう一つ目的がある。彼は春山合宿の利尻岳東稜に登る予定であるのだが、雪山の経験がないのである。そこで、ちょっときついかも知れないが参加してもらうことにしたのである。もっとも、我々

でロープを出さずに済み、ロープを出す準備をしていた先行に追いついた。我々もここでロープを出し、先に行かせてもらう。雪壁を2Pブッシュを頼りに登り、ロープを仕舞う。山頂稜線直下の雪崩の起きそうな斜面を間隔を大きく開けて、一気に登る。雪底の大きく張りだした広い稜線を歩いて禿岳に着く。山頂でゆっくりと早めの昼食を取った、いや取ったつもりだったのだが、後から聞いたら、紺野君はパン1つ食べる時間しかなかったそうである。山頂からは県境尾根を北上する。

東側には大きな雪庇が連なっていて、西側斜面を慎重に進む。県境尾根から東に延びる鉄砲尾根を下ることになるのだが、東斜面には雪庇が、連なっているのかつかずに近付けないので、下り口がよくわからない。この辺りだろうと見当を付けて、偵察に雪庇の方に近づいた。雪庇の端まで3mというくらい近づいただろう

からすれば交通費の割り算の分母が大きくなる効果も狙っていたのであるが。当然、彼の道具はすべて新品で、全部揃えるのにウン万円も掛かったそうである。道具を揃えるのにお金がかかり過ぎて山に行けなくなるのも困るし、かといって道具がなければ一緒に行けないし登れないのである。だから、彼のように思い切っていっぺんに揃えるのは結局は正解なのではないだろうか。

ゴルフクラブ前から雪の積もったゴルフコースを横切って尾根末端に向かう。末端には、昨日登ったものらしいトレールがあった。樹林帯が終わる辺りにテント2張りの跡があって、そこからのびるトレールは先行パーティのものであることがわかった。尾根が痩せてきた辺りで8人ほどいる先行パーティが見えた。彼らのトレールのおかげ



ダイレクト尾根を登る

か、突然”シュイーン”と刃物で何かを切った様な音と共に周りの雪が崩れて行くのが見えた。あれ？何だろうと思っていると自分の体も下に滑り出した。周りの雪は大きな塊で崩壊していく。やばいと思ったが、1m位落ちたところで止まっていた。雪底の踏み抜きをしてしまったのだ。十数メートルにわたって雪底が崩れていた。ちょうど雪底の切れ目に立っていたため、雪と共に落ちなかったのと、そこがちょうど鉄砲尾根の真上だったため止まったのだった。あと1m程、どちらかに寄っていたら、転げ落ちていただろう。どきどきした気持ちを落ち着けて慎重に鉄砲尾根を下る。腐った雪の尾根を途中一箇所急斜面をクライムダウンし、隠れた雪の割れ目にすっぽりとはまったりしながら下り、再びゴルフコースを横切って車に戻った。鬼首の間欠泉を見に立ち寄って、降り出した雨の中を帰路についた。

鬼首ゴルフ場クラブハウス前(6:41)－ダイレクト
尾根取り付け(7:25)－禿岳(10:26~10:45)－
鉄砲尾根下(12:02)－鬼首ゴルフ場クラブハウス
前(12:34)

(古山 記)



禿岳頂上にて

雪上訓練（パート1）

1996. 4. 13.

パーティ L 古山正文、澤田仁、新美達也

4月だというのに肌寒い日の続いた頃、古山さんと澤田さんと新美の三人で谷川マチガ沢に雪上訓練に出かけました。雪に全くの素人の私は新品のプラスチックブーツ、アイゼン等を持参して、いそいそとつくばをPM11:00に出発しました。普通ならばAM2:00頃には到着する予定が、途中から雪に見舞われてチェーンを装着する羽目となり、このままちんたら行った日にはお天道様が登ってしまうとの判断から、新前橋まで戻ってそこで仮眠を取り、翌朝、電車で土合まで向かうことに変更したのでした（らしい・・私はその頃車の中で熟睡していました。）

翌日、土合からマチガ沢に向かったのですが、

当然のごとくここも雪。天神平スキー場は90cmの新雪が降ったそうです。そのため雪上訓練はさながらラッセル訓練となり、予定したマチガ沢まで入らず、途中の斜面で圧雪して滑落停止訓練を行いました。初めてだったゆえ、古山さんと澤田さんを何回か殺してしまいました。来冬に雪山に行けるよう、十分練習せねばならぬと思い知らされた次第です。

帰りは再び新前橋まで戻り、車につくばまで帰ってきました。

（新美 記）

雪上訓練（パート2）

1996. 4. 20.

パーティ L 古山正文、紺野哲雄

今回マチガ沢で雪上訓練を行いました。本当は先週行くはずだったのですが、仕事とプライベートで用が出来て、僕は行けなくなり、皆さんに大変迷惑をかけてしまいました。古山さんには二週続けての雪上訓練となってしまう、大変申し訳ない思いと、とても感謝の思いです、本当にありがとうございました。

下館に集合しまして、谷川岳土合へと向かいました。到着後に登山指導センターで少しお酒を飲みまして、就寝。

翌朝、目を覚ますと雪が降っていました。身支度を済ませ、登山指導センターを出発し林道を行いました。しばらく行きますとマチガ沢に着き、

少し登ったところの斜面でザックをおろし、雪上訓練に入ります。初めはツボ足歩行で、上へ下へ横へ斜めにと歩行時の足の踏み出し方、踏み込み方を指導してもらい、それからアイゼンを着けて同様の訓練を行いました。次に滑落停止訓練を行い、ビレー訓練に入りました。すべて大切なことだと思いますので、しっかりと身につけたいと思います。何よりも転ばないことが一番だと教わりました。

（紺野 記）

不帰Ⅰ峰尾根

1996. 4. 27~29

パーティ L古山正文、笹平孝

夜、下館を出発して佐久を通して八方尾根スキー場へ行った。八方尾根スキー場で道が判らなくなってしまう、リフト乗り場を見つけるのに時間がかかってしまった。それから車の中で仮眠をして、ゴンドラリフトの運転時間に合わせて駐車場を出発した。天気は快晴で、青空に雪がたくさん残っている山々を見ていると気分が良くなってくる。

まず、ゴンドラリフトに乗って、リフトを二つ乗り継いで八方池山荘の終点まで行った。そこから八方尾根を登り始めた。尾根はなだらかだった急だったりで、体はオーバーヒート状態で、八方支尾根の分岐点に付いた。そこからみる不帰Ⅰ峰尾根はとても迫力があって、今にも雪崩がおきそうな感じがした。不帰Ⅰ峰尾根の取り付きに行くには、この八方支尾根を下ることになる。せっかくここまで来たのにもったいないと思いながら、一気に下った。途中唐松沢に延びているルンゼを下って唐松沢に出る。雪崩の危険があるので急い

で沢を渡った。取り付きは不帰沢の方に回り込んだ所にあるルンゼを登った。けっこう急斜面だったので少し登ったところでロープを出して、8ピッチ位でP1の雪稜に出た。そしてこの近くの所でビバークすることにした。

次の日、出発するときにすぐ近くに先行パーティがいた。一応ロープを出して先行パーティの足跡どおりに進んで行った。P1からP3までは、ナイフエッジがあったり雪庇がある雪稜で、けっこうスリルがあった。断壁の所に着くと雪で岩場がほとんど埋まっていたので1ピッチほどで岩場の所はぬけた。あとはまあ歩きやすい雪稜を登って行って、最後の壁の所を木登りで抜けて稜線に出た。そしてⅠ峰の頂上に立って、今回登ってきたところをしばらく眺めていた。時間が半端

だったので、Ⅰ峰とⅡ峰の間のコルにビバークした。先行パーティの人たちもここでビバークしていた。

次の日はⅡ峰北峰の所までロープをだして、そこから夏道を通して唐松岳へ登って行った。唐松岳から八方尾根を下って八方尾根スキー場でリフトに乗って、無事駐車場に着いた。3日間とも晴れたので、快適な山登りができた。

4/27

駐車場(7:30)ーリフト終点(8:30)ー
八方支尾根分岐点(11:00)ー取り付き
(13:30)ー(16:00)

4/28

P1(5:30)ーP2(8:30)ー
Ⅰ峰(15:30)ーコル(16:00)

4/29 コル(6:00)ー唐松岳(9:30)ー
リフト終点(12:00)ー駐車場
(12:30)

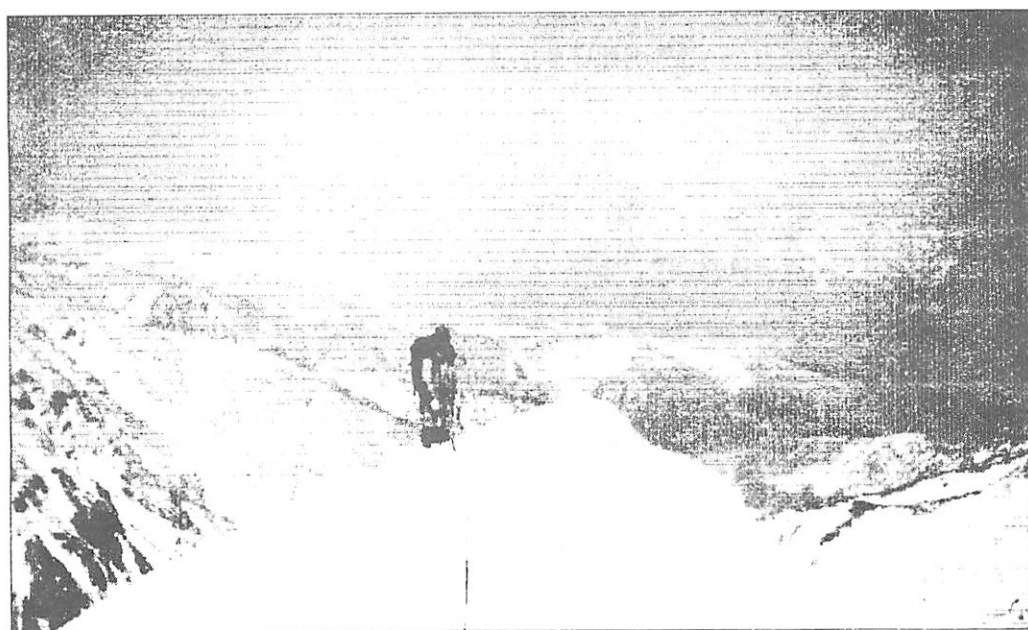
(笹平 記)



Ⅰ峰尾根を登る…笹平



Ⅰ 峰尾根上部にて



不帰Ⅰ峰にて

立山（タンボ沢）春山スキー

1996. 4. 28

パーティ L本図一統、菊池光夫

今夜も下館の無料駐車場に集合して、高崎経由の三才山トンネル越えのコースで高速代を浮かす。下仁田、妙義付近の長い登り坂があると車はかなりきついとみえて、即青筋を立てて走る。本図氏の運転もかなり過激である。オーナーだから出来る運転だ。でなくても、あのデリカは心臓移植まで行った有名な車なのだから、今後は愛情を持って大切に皆さんで使いましょう。

超高速で4時間ちよいで扇沢手前のゲートに着く。習慣である酒盛りをして早朝6時ゲートが開く。車が列をなして行くが、1台前の方に待っていた車は朝寝坊でそのわきを皆通過していく。馬鹿だよな～、早く着いて順番待ちをしても寝坊して抜かれちゃ意味ね～よな、クラクションで起こしてやっかなんてぶつぶつ言いながらも通過していく本図氏である。駐車場に着くと要領がいい本図氏は、切符を先に買わずにザックとスキー板を、トロリーバス乗り場の待ち合いの最前列の所に置き、その後、キップを買いに長蛇の列の後へと並ぶ。乗り物はすべて一番で乗り継ぐ。

左側からの急斜面は想像を絶するため、右側にコースを取り滑るが、本図氏は目だちたがり屋さんで、ロープウェイのギャラリーの喝采を浴びようとの事で、ロープウェイが近づいて来たら、一気に谷底まで行くべとの事であった。雪の状態は春の雪なので雪が重く、非常に滑りにくかったが、賛沢は言ってもらえない。私は斜滑降ぎみにジグザクを切って降りて行くが、傾斜がきつく恐ろしい。落ちれば下まで流されそうなので、中間部位の所よりスイスイと試みるが、本図氏のようにシュプールが書けず、また体とスキー板のバランスがうまく取れず、膝や太股に負担がかかりかなりきびしかった。大急斜面を降り、ロープウェイの近くの斜面で昼のビールを飲む。ゴールデンウィークなのに、今日は2人だけのシュプールなので雪面は大きすぎた。これより残り1/3は、樹林帯の所が少々あったが、難なく黒部湖まで滑り降りる。黒部湖はまだ厚い氷で覆われており、周遊道で採るはずだった、落のとうもまだ無く、帰りは高瀬ダムの方まで落のとうをさがしに行き、ニコニコ顔で帰ってきた二人であった。

室堂に着き、登山計画書を提出後、スキー板をザックに固定して、雲一つとない良い天気のもと、一ノ越小屋をめざして登る。約1時間強で小屋に着く。小屋のわきでセブンイレブンのそばを喰い、これより滑る。東一ノ越の方角を現地で確認をしておく。他のスキーヤーは、一ノ越小屋から真下の沢筋を滑って行くようだ。

当方二人組は、小屋よりトラバースぎみに横へ横へと滑って行くが、20分もすると、ガレ場が出てきてスキー板を担ぎ、ガレ場を進む。するとまた雪の斜面がありとてもピッケル、アイゼンなしではトラバース出来そうにない。だがスキー板をはけば難なく越せる。落ちれば300m～400m流され、止まらないだろう。本図院に入院だ。その後またガレ場、雪の斜面と2回ほど越えて、一ノ越小屋より約1時間くらいで東一ノ越のゴルに着き、これより進行方向を左側にとり、ロープウェイの方角になる。

最初の滑り出しは約40度の傾斜を持つ斜面である。冬から春にかけては雪崩の巣である。特に

扇沢(7:30)－室堂(9:28)－一ノ越(10:14～11:00)
－東一ノ越(11:20)－湖岸道(12:33～12:58)－
ダム駅(13:35)－扇沢(13:53)

(菊池 記)



一の越での菊池



東一の越にて・本図

ヒマラヤ（クーンブ山群）トレッキング

= 憧れのチョモランマ in ネパール =

1996. 4. 27 ~ 5. 5

パーティ 生井一男、他11名

ある朝、もうこれ以上じっとしてられないという衝動が脳裏を貫いた。すると何処からか『早くしろ！もう時間が余り無い。今動かなくては、もう二度と朝が来ない』と云う声がした。12月も中旬を過ぎた頃の事である。それから数日後、同じような衝動が勤務時間中にも起こった。何故だろう？こんな状態になるのは……。何かが俺を呼んでいる。そんな感じがするのである。何者かに急かされる様なそんな強い衝動に駆られ、取り敢えず、手頃な旅行会社に当たってみた。パンフレットをもらい、自分の休みに合うのは無いか、どんなルートが有るか等を調べるが、丁度いいものが無いなぁと思っているうちに年が明けてしまった。

年が明けてからも何か落ち着かない。2月になってからは、よくよく考える様になってきた。やはり、もう現実にしなければ、とまた動き出す。

何か面倒だなあ、どうにか成田から行けないかなあと思っていた。そして数日が過ぎて4月に入ったある日、会社にアトラストレックから緊急電話が入った。話の内容を要約すると、どうも数人の（私を含めた）エアーチケットがオーバーブッキングになったとの事。ツアーを成功させるには、27日にタイ航空に振り替えなければいけなくなった事。タイ航空に振り替えるとトランジットの為バンコクに一泊しなければいけない事。その宿泊代はアトラス持ちである事。それとカトマンドウの市内観光がサービスになった事。当然、成田発になった事。との連絡が入った。

私の思惑通り成田発になった。なんてついているんだろう。『求めよ、されば与えられん』と、云うのは本当だった。やはり私は神に愛されているんだろうか。

順調に渡航日が近づいてきた。最終説明会が4月18日に東京大手町であったのだが、午後6時30分では、到底間に合わない。仕方ないので詳しい事は、宅急便にて送ってもらう事にした。それによるとまた出発時間が1時間早くなっていた。色々ハプニングが有りそうで何だかワクワクし

決行日をゴールデンウィークに決め、やはりエベレスト方面。ナムチェバザールも行ってみたい。と色々検討していくが、しかし時すでに遅く各旅行会社は、空席が無い状態だった。そうなる元来“天の邪鬼”な性格の私は、意地でも行ってやるぞとなる。あっちこっちと調べ、ようやくアトラストレック社のツアーで日程的にも、予算的にもちょうど良いものがあつたので、早速予約し、席を押さえた。（本来なら個人旅行で、自由に自分で手配して行きたかったが、そんな余裕はなかった）。

これで、ようやく旅立ちのレールを列車が動き出したのであった。旅立ちするのはいいのだがしかし、ロイヤル・ネパール航空の直行便は、関西国際空港⇄カトマンドウ（トリブバン）国際空港という空路なので、羽田空港からになる。朝が早いので近くのホテルに泊まらなければいけない。

てくる。生まれつき冒険心が強い為だろうか？。一部にはトラブルメーカーだという声もあるが。

4月27日。いよいよ今日、ネパールはカトマンドウに向け出発である。一人旅も海外となれば、かなり不安もある。まあ、それも有ってツアーに参加した訳だが、しかし自分で選んだ旅である。十分に楽しまなくちゃ。そして心を開放させて、器の大きな人間になって帰って来たい。

昨年の体の大不調で、本を読む機会が多くなった。特に沢木耕太郎氏の「深夜特急」や後藤ふたばさんの「チベットはお好き」が気に入った。彼らと同じ経験が出来たらなあと思っていた事が、今日からの山旅の動機である。

午前5時過ぎに家を出た。早朝なので、順調に車を走らせられ、7時10分に成田空港に着いた。近くの民間駐車場に車を預け、集合場所である第2ターミナルのG-30のカウンター前に行く。集合場所にはまだ誰も来ていなかった。集合時間は8時なのでまだ30分は有る。本を出し読んで時間をつぶす。ツアーリーダーの梶山さんは電話で声は知っているが、面識はない。彼が探してく

れるように胸にアトラストレックから届いたバッジを着け待つ。案の定、8時近くになって彼からお声掛けが有った。気がついてみると私の周りには人、人、人で囲まれていて、すごい混雑になっていた。流石にゴールデンウィークである。そうこうしているうちパーティのメンバーが全員集まった。各自セキュリティ・チェックを済ませ、手荷物以外の荷物を預ける。(この荷物は、成田からカトマンドゥまで送ってもらう、ので往復の道中は手荷物だけである。)

ここで今回のパーティの紹介をしておこう。まずは、アトラストレック社のツアーリーダーである梶山さん、そしてツアー参加者の吉田さん、中谷さん、保田夫婦、平さん、湯本さん、野口君、そして私の8名である。保田夫婦以外はすべて単独にての参加である。それに関西方面より3名参加。小谷さん、丸山さん、北條さん。彼らとはカトマンドゥで合流する。合計12名のツアーである。

成田発10:00のTG-643便に関東勢8名が乗り込み、まずバンコクに向けテイクオフ。久しぶりの飛行機は、気持ちが良い。機内食は美味しいし、お酒も飲み放題、スチュワーデスのおねえさんも綺麗だし、ツアーのメンバーともすでもうお友達状態になったし、これからのツアーも楽しくなりそうだ。

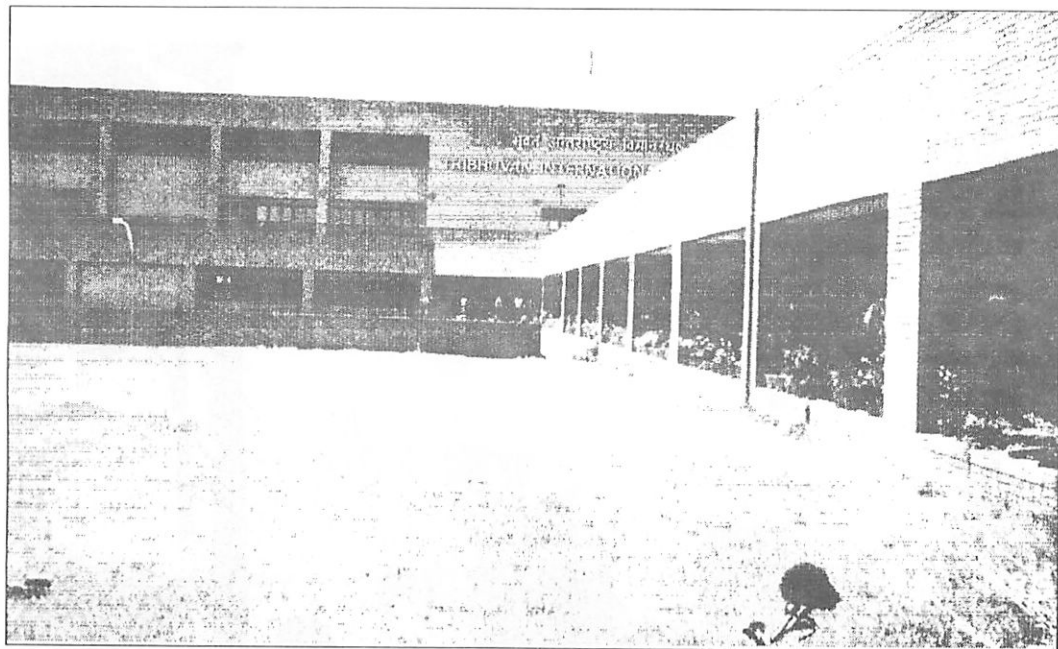
バンコク14:47、到着。空港では現地ガイドのユウコさんが出迎えていた。ホテルにチェックインする前に市内観光をする。ユウコさんは日

本人で6年位前にタイに帰化したそうである。

いやあ、しかしバンコクは車が多い。恐ろしいくらい(今にも壊れそうな)の車も走っている。バスで回っているうちに事故を数回見てしまった。それくらい凄い所なのである。

ユウコさんの勧めでみんなと買った果物(ドリアン、マンゴスチン、マンゴー等)を食すが、私にはドリアン(果物の女王様)は苦手になった。異国に来てカルチャーショックを味わいながらホテルに入った。ホテルで相部屋になった野口君と「異国の夜に乾杯」と現地のビールで祝杯を上げた。

4月28日。10:30発TG-311便に搭乗。カトマンドゥ12:35到着。テレビで見たあのカトマンドゥに今、降り立った。異国に来たのだが、何故か?、一度来たことが有るような?、こんな光景を経験をしたように感じるのは何故か?、俗に言うデジャブ現象なのだろうか?。そんな思いの中、入国ゲートが開くまでロビーで待っていた。何しろのんびりしている国である。しばらくして入国ゲートが開いたので並んでまた待つ。現地の人、いろいろな異国の人、そして我々と入国ゲートにはたくさんの人でにぎわってきた。我々の後ろの方にも日本人のパーティがいた。何やら何にか迷っているらしい。何を迷っているのか疑問に思い後ろを伺っていたら、そのパーティの女の子がつかつかと、私の処へ近寄って来て、



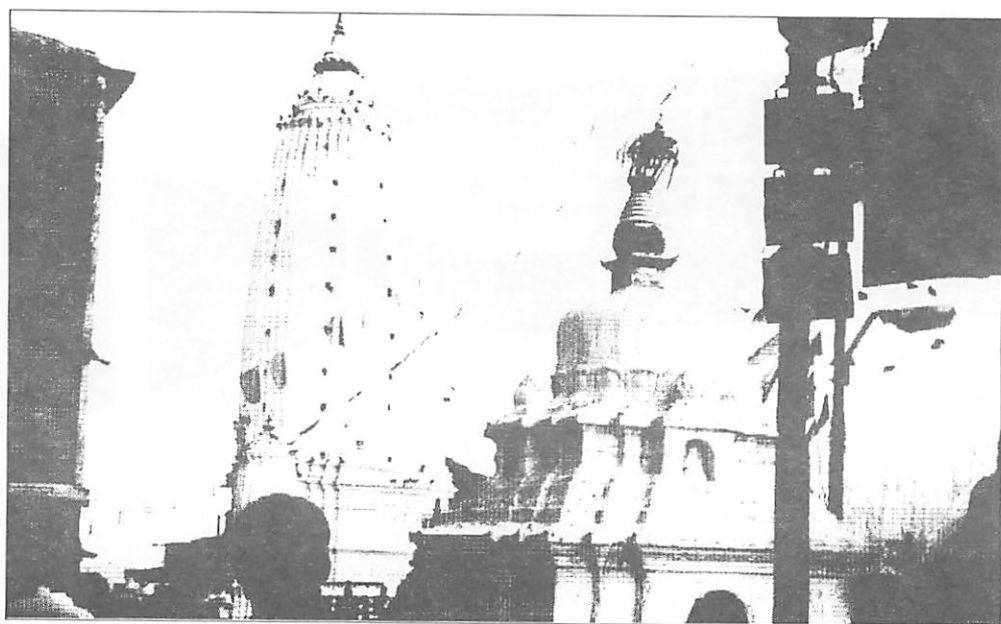
カトマンドゥ(トリブバン)国際空港

『Excuse me. Is this way with Visa or With out Visa?』と英語で聞いてきた。最初は何の事が分からなかったのだが、ゲートの方を見ると、[With Visa] と [With Out Visa] と書かれてあったのでは〜ん成程と理解し、『This wey is With Visa』と答えると、彼女は『Is With out Visa That way』と言った。その後の質問はすべて『YES』と『NO』で答えた。彼女も分かったらしく自分のパーティに戻り、今度は日本語で『こっちじゃないんだって、隣の列がビザ無しの列だって』と、すると『そうか、そうか、やっぱりそうか』と、隣の列に皆と並び直していった。

ここカトマンドゥ空港では入国の際にビザが取れるのである。だから入国口は、[With Visa] と [With Out Visa] の二つに分かれている。よく見ると壁にビザについての掲示があった。ビザ無しの方が、どうしてか列の流れが早いようだ。ビザ無しで来てここで取った方が安いみたいだなと、そんなことをツアーの仲間と話していて、ふと、さっきの事が気になってきた。彼女は何故、私に英語で話しかけてきたのだろうか?、日本人に見えるはずだが……。その事をツアーの野口君、湯本さんに話すと、『生井さんをきっと現地人と勘違いしたんじゃないかなあ』『じゃなけりや、日本語で、話しかけてくるんじゃないかい』『おい、おい、そうかよ、なんて失礼な、私は生粋の日本人だぞ!』と思い、彼女を探すが、もう見当たらなかった。結局、彼女の真意は分からなかった。私は心の中で、『何で日本語で話さない

んだよ。俺を現地人と間違えないでくれ。シェルバ庄司じゃあるまいし、何で俺が現地人に見えるんだよ』と、ちょっと気分を害したが、まあ〜いっかと入国審査を終え、日本からの荷物を受け取り、空港の外に出る。空港の外にはシェルバホテルの迎えのバスが来ていた。空港の外に出た途端13〜4歳ぐらいの数人の子供たちが、日本語で『荷物持ちます。荷物持ちます』と近づいて来た。ホテルのアルバイトかなと思い、荷物を預け、バスまでちょっとした距離なのだが持ってもらった。すると『チップ、チップ』とチップを請求してくる。日本円でもいいと云うので、10円玉をやったら、『赤いお金じゃなくて、白いお金下さい』と言う。それじゃと1円玉を上げようとしたら、『これじゃない。白いお金。白いお金。』とうるさい。どうも日本円(コイン)の貨幣価値が分かるようだ。まあいいかあと100円玉をやったら、もう蜘蛛の子を散らすように消えていった。ああ〜と思っていると、誰かがズボンを引っ張る者がいる。何だと振り替えると、小さい子供が、『チップ、チップ』と手を出している。それを見ていたホテルの従業員らしい人に一括され、その子はどこかに消えていった。バスに乗ってよく見ると、さっきの子供の集団は、空港から出てくる人皆に同じことをしていたようだ。本当に強かに生きている。

迎えのバスで、シェルバホテルに行き、チェックインする。午後からは、カトマンドゥの市内観光になった。



スワヤンブナート寺院

これはオーバーブッキングになってしまった事でサービスになったものである。

まずはスワヤンブナートに行く。前にビデオで見た時は、もっと広い所なのかなと思ったが思いのほか狭い感じがした。前からここには来てみたいと思っていたのでラッキーであった。

ここスワヤンブナート寺院は、カトマンドウの市街の西方3km、約80m迫り上がった丘の上に建つストゥパー様式の仏教寺院。猿が多いことからモンキーテンプルとも呼ばれている。

その昔、文殊菩薩がかつて大湖だったカトマンドウ盆地の一角をたち割って、湖水を流出させた時に一番早くに現れた丘がスワヤンブナートだという。起源は約2000年前との事。サンスクリット語で、スワヤンは自らの、ブは大地・地球で、自在神・仏陀となる。

参道の登りの道端には、赤子連れの物乞い、片手片足が無い物乞い、おみやげ売り等々がひしめきあっていて、ここでもカルチャーショックを味わった。この国も貧富の差が激しい。バンコクも貧民街と言うかスラム街があったが、ここも同じである。かたや、制服を着た小学生らしい集団。

(私立らしい) 彼らは裕福な家庭の子供だ。

かたや、ぼろ雑巾のような粗末な着物を着て寝ている子供。貧しい家庭の子供。宗教をこれだけ重きに置いている国でも、貧富の差は著しく激しいものだ。日本の裕福さが、ひしひしと感じられた一瞬であった。

次に歩いてハヌナンドウカ、ダルパール・スクエアー、クマリの館などを観光し、バスでシェルパ・ホテルに戻った。異国に来た感じ(カルチャーショック)が全身に伝わってくる。ホテルの部屋で、また野口君と「異国の夜に乾杯」とネパールビールを飲んだ。

4月29日。晴れ。6:00にモーニングコールがあったが、もう既に5時頃に目が覚めていた。6時半に朝食を食べ、7時にシェルパホテルを出発し、カトマンドウ空港へ行く。

今日はヘリでシャンボチェに行き、ナムチェバザールまで行く予定だ。いよいよトレッキング開始である。カトマンドウ空港到着後、早速ボーディングバスが配られ、搭乗待合いロビーで待つ事になる。ここからのフライトは時刻表、搭乗アナウンスなるものは無い。すべてが天候次第なのである。

何時フライトになるか分からない。だからその情報収集が大変だ。かなりネパール事情に精通していなければ個人では来れないと思った。売店でクーンブ山群の地図とコーラを買い時間をつぶす。地図を見ながらまどろんでいると、いきなり『シャンボチェ』と搭乗コールがあり、全員バスに乗り、アジアンエアのヘリポートまで運ばれた。ヘリに搭乗し、いよいよだと思っていたらヘリのエンジントラブルで、調整の為ヘリを降ろされた。直るまでヘリの回りをうろちょろしていたが、そのうちみんな芝生の上でひっくり返って昼寝である。よくよく待っても直らないので、待合いロビーまで戻ることになった。やはりネパールであるとうなるか分からない。ロビーに戻って、1時間弱で、またいきなり『シャンボチェ』とコールがあったので、ヘリポートまで行き、搭乗するが今度はシャンボチェの天候が悪いとの事で、又ロビーに逆戻り。『飛べないんだったら、何で呼ぶんだよ』とみんなブーブーである。歩いた方が気分が良いと、飛び立つ飛行機を見ながら歩いてロビ



Asian Air機の前にて…生井

一まで戻った。またまた待機状態。しばらく待つがハッキリした事が分からない。このままでは今日は飛ばないかも知れない。最悪の場合はシェルパホテルに戻り、明日一番のフライトにかけられないと言う話も出てくる始末である。あきれかえってものも云えない状態だ。待つ事2時間程、ようやく搭乗口より『シャンボチェ』とのコールが聞こえた。一斉にザックを背負い、3度目のトライである。ヘリに搭乗したのはいいが、果たして飛ぶかどうか不安である。周りの雰囲気からしてどうも行けるらしい感じである。暫くして機長が乗り込んできた。エンジン始動。10時50分。テイクオフ。やはりネパールに来たらピスターリ、ピスターリ（ゆっくり、ゆっくり）である。

午前11:50、シャンボチェ到着。晴れているのだが、雲が多い。しかしここからの景色は最高である。雲に隠れながらも時々ピークを見せるタムセルク、目前にクワンデ、遠くはローチェ、エベレストと凄い景観である。

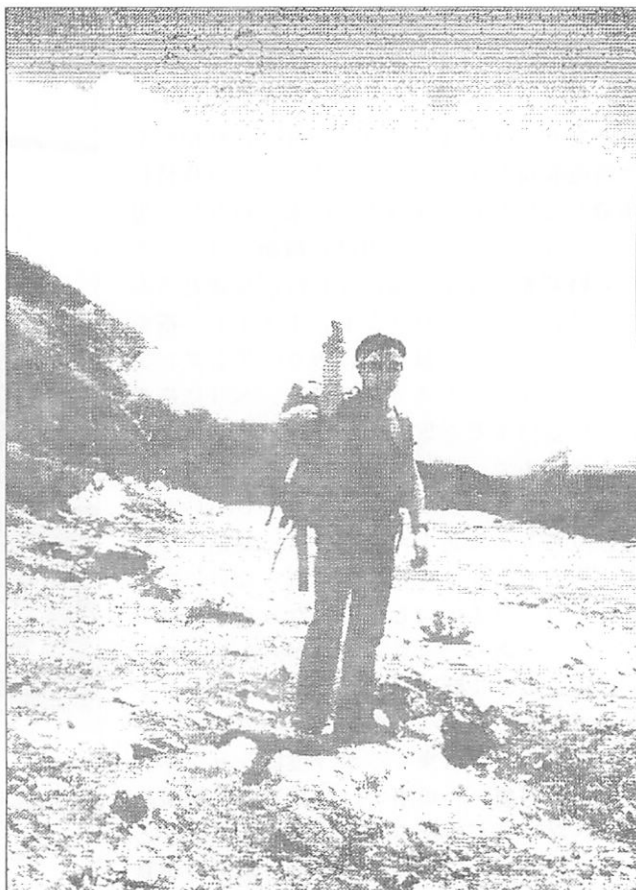
ここシャンボチェからナムチェバザールまで1時間位の下降である。少し降りるともう眼下にナムチェの村が見えた。ここからはナムチェバザールの村の全貌が見えて圧巻である。降りなが

ては、日本語が上手だと思ったら日本人だったんだネ』と言うと『そうなんです。この衣装はすべてネパールのもので、靴だけ日本製なんですヨ。』と、言った他愛も無い話をしたり、互いの予定を聞いたりして、『もしカトマンドウで再会できれば、いいですねえ』と言って別れた。後で聞いたのだが、シャンボチェで、中谷さん達は“地球の歩き方”という本を貸してください。と、話しかけられて面識は有ったらしい。彼女はネパールは一人旅で、もう1ヶ月もいるという事だった。たいしたものだ。女の人、つくづく度胸があると思ってしまう。その後ナムチェの村の探検をしながら一人散策していた。

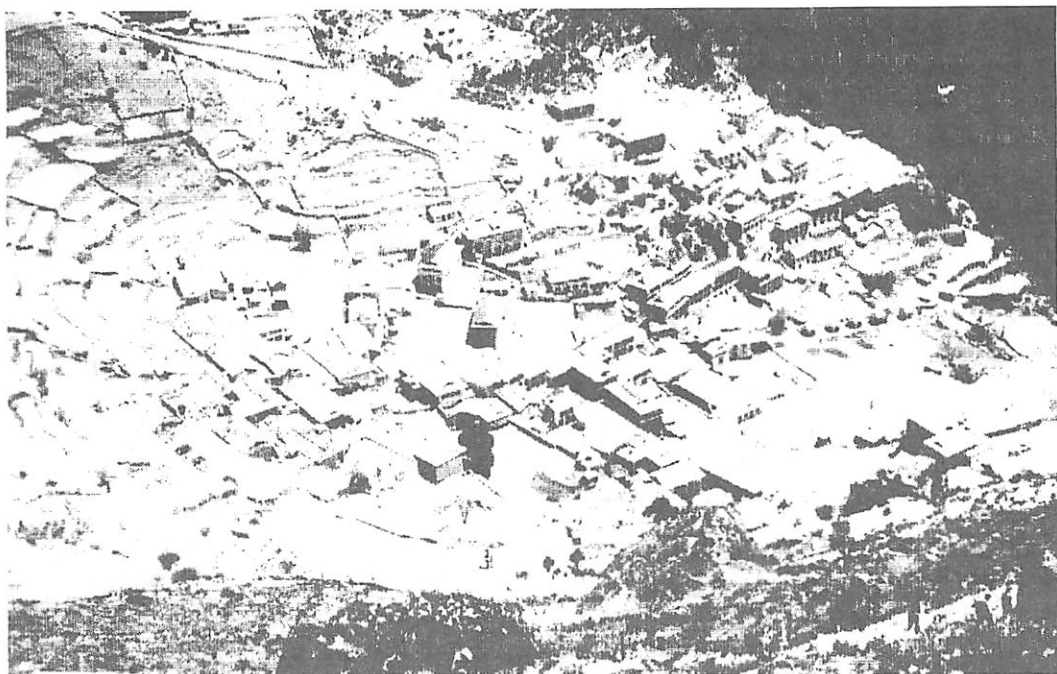
ナムチェのお土産屋を見ていて思ったのだが、最初は値切らず、言われた値段で買っていた。でも野口君がルピーの持合せが無く値切ったら、700ルピーが400ルピー位になったと言う。それじゃと、私も値切ってみたら結構値が下がる。そのうち値切るのを覚えると、値を下げるということより、交渉が面白くなって来た。（ある程度吹っかけてあ

ら見た岩壁に書いてあるチベット仏經の仏画が鮮やかで凄かった。ピスターリ、ピスターリと憧れのナムチェバザール到着。上から見た時にあったテントサイトに到着し、昼食になった。

昼食後、フリータイムにすることになるので、ツアーリーダーの梶山さんより『フリータイムとはいえ、絶対にテントで寝ないでください。いきなりの高度で横になると高山病の影響が著しく出ますので、下のお土産売り場とか、バザールとかを見に行かれて体を慣らしてください。今日の夜までには慣れると思いますので、散歩とかして慣らしてください。4時にはまたこちらまでお戻りください。お茶になります。高山病予防のにもなります。お茶は十分にとってください』との注意があり、各々ナムチェバザールの村へ分散した。私も、野口君、中谷さん、丸山さん等とお土産ゾーンのある処まで見物方々行ってみた。細い道を降りて行き、外に飾ってあるお土産の所まで来たら突然、現地の衣装を着た女性に『こんにちわ』と声を掛けられた。最初、私は日本語のうまい売り子さんだと思ったら、彼女もお土産を見ていた日本人だったのだ。『まったく、私は現地人にし



トレッキング開始！…シャンボチェにて



シャンボチェからの下降路にてナムチェバザールを望む



一人旅してる彼女とツーショット

る値段だとは思わが…。)

例えば、一発回答が700ルピーだとすると、『ノー、ノー、プライスダウン、ダウン、500ルピー！オッケイ！』と言う。すると向こうは少し考えてから『600ルピー』とくる。『しゃないなあ〜じゃあ550ルピー』にしると言う。傍から見ると、お互い何語で話しているか分からない状態だが、意思の疎通は取れているようだ。交渉は続き、仕舞いには電卓の登場となる。まるで浪花の商人の様だ。『なあ、もう少し負からんかい』と言うと、『これでどうでしゃろ』と電卓を叩き値段を見せる。それを見て、少し下げろと出た値段を直すと『旦那、旦那、殺生でんがな。じゃあ、これでどうでしゃろ』となる。こちらが、もういいという素振りを見せて、店を出ようかすると、『旦那、旦那、わても清水の舞台から飛び降りたと思おうて、ここまで勉強しまっせ、でもこれがぎりぎりです』となって、大体思った値段に落ち着く。しかしこの店を出ようとする素振りをみせる時に売手の状態を見るというか、駆け引きをうまくやらないと、それで終わってしまう。でも値切りの楽しさというか面白さがわかったような気がする。ネパールにいた時は、全員値切りのテクニックを磨いていたみたいだった。こっちの方面の駆け引きは某M氏の大得意分野だろうと私は思った。

ナムチェバザールにいても、すっかり現地に馴染んでしまい違和感が全く無い。キャンプ地に戻

り、各々戦果を報告して、夕食になった。その後各々のテントの戻り、就寝した。

4月30日。起床5:30。今日はナムチェバザール滞在である。起きてみると回りはガスっていて、時々その切れ間からクワンデが見える程度である。ナムチェは丁度、涸沢のようなカール状の斜面で、正面の開けた方向にクワンデが見える。まるでお椀の底にいるようで、他の山は見えない。

今日の日程は、午前中はタンポチェに行く道でもある展望台まで登り、ビジターセンターまで行く。途中、トレッキング・パーミットをチェックポイント（ポリスオフィス）でチェックを受け、見られれば、エベレスト、ローチェ等の展望と高度順化などの為に半日を費やす。午後はシェルバのサダーであるテュブテンの家に招待されたので遊びに行く。彼はアトラスで手配したヒマラヤン・ジャーニーという会社のシェルバだ。

私は今回ビデオカメラを持ってきた。これといって確証は無いのだが、奇麗な映像が取れる様な予感がしてならない。何故ならあの不思議な声が言うのである『きつと持ってこい。後悔はさせない』と。しかしビデオを持ってくるのにちょっと戸惑ったのだ。何故なら、国立公園内を映す場合はUS\$100ドルを払わなければいけないと聞かされていたからだ。「ええ〜い」どうにかなるさと結局持ってきた。キャンプ地から村の東の尾根上にあるチェックポイントに行く。ここでビデオ



ナムチェバザールの町並

を出していたら、シェルパのクマールが近づいてきて隠せという。彼に従い何事もなかったかの様に隠した。どうもボリスに見つかる、US 100ドルを支払わなくては行けないらしい。また、彼が近づいてきて『ノープロブレム』と小声でいう。どうも払わなくてもよさそうだ。ばれなかったようだ。何ともおおらかである。ピスターリ、ピスターリと尾根を登って行く。尾根の上に出ると一気に展望が開け、丘の上にはビジターセンターが有った。ここからの展望は最高である。もし視界がクリアなら360°の大パノラマが広がり雄大な景色に圧倒されるはずだ。しかし何故かしら、雲が多く後から後からガスが上がってくる。展望台の所で皆とエベレストを見ようとかかなり待ってみたが、雲がず〜っと張り付いていて、よく見えない。『カメラにその姿をおさめるまで、ここを動かんぞ』と粘ってみるが中々思うようにはならない。結局、みんなはビジターセンターに見学に行ってしまう、私一人ぼつりと待っていた。『ああ！つまらないなあ』と思って、ふと後ろを振り替えると、そこには、シェルパの〇〇がいた。(名前を忘れてしまったので〇〇としておく)。広場の草原で横になって、私を待っているのだ。

く書かれていた。その仏壇みたいなやつの中にダライ・ラマ14世の写真が飾ってあったのが印象に残った。

彼は、婚約している人がいるそうだ。ちかじか結婚するそうだ。なのに子供がいるとのこと。その話になるとちょっと照れくさそうだった。彼の家でミルクティを御馳走になりながら、いろいろな話を聞いて楽しい一時を過ごした。15:30に彼の家を出て、また自由時間となった。大分みんな慣れてきたようで、明日からのトレッキングが楽しみだ。

5月1日。6時30分、モーニングティが運ばれた。起床の時間である。各自シェルパに預ける荷物を出し、朝食を食べに行く。今日はタンポチェに行くのであるが、どうも小谷さんは体の調子が思わしくないようだ。結局、彼だけナムチェに滞在するようだ。

ナムチェバザール7:57出発。昨日の道を登り水平歩道まで上がる。サナサまで約3時間ぐらいである。ゆっくりゆっくり行く。まるで北アルプスの縦走路の様で全く違和感がなく歩きやすい。

私が迷子にならないように。私が、帰ると言うまで、じっと待っている。私も何か悪いなあと感じて、今日は見えないからとビジターセンターに向かうと、彼もつかず離れずで着いてくる。感心した。彼の仕事だからとはいえ、今までこんな山旅はしたことなかったので、何か恐縮してしまう。

ビジターセンターの中は日本でもよく有る、山岳の歴史、山の有名人、ルート、山域名などが掲示してあった。一通り見て、ナムチェに戻った。

昼食後、テュブテンに案内されて彼の家に行く。彼は、シェルパになる前はチベット仏教の僧侶の修行を8年間もしていたそうだ。(ネパールでは、次男は僧侶になる為小さい時より修業をしないではいけないらしい)。彼の家に到着。彼のお母さんがいて出迎えてくれた。家の造りは他の家と同じで一階は納屋になっていて、二階が住まいになっているようだ。細い階段を昇ると居間が有り、その奥に彼の家のゲストルームが有った。それはとてもエキゾチックで、異国に来た感じで一杯になった。そこには、日本でいう仏壇の様なものが有った。この奇麗な仏壇みたいなやつは、彼が造り、絵を描き、染めたとする事だ。彼が書いた貴重な仏画も見せてもらったが、とても奇麗でうま

回りの景色を見ながらピスターリで行く。奇麗なシャクナゲ林を行くと小沢に出合い、1軒のロッジのあるサナサに着いた。ここで小休憩。ここから先は下りとなり、ドゥード・コシの谷底まで下る。谷をはさんで前方遠くのタンポチェの丘にゴンパ見える。途中トラシンガの村が眼下に見えて来る辺りから樹林の中を一気にドゥード・コシの谷底まで下る。吊橋を渡ってから台地に登れば、そこがブンギだ。

ブンギ到着12:00。ここでお昼である。もうシェルパ達は到着していてキッチンボーイ達が昼食前のお茶を配っている。シャクナゲ林の下に、シートが広げられている。我々が一息着いた頃、昼食のセッティング終了。各々好きなところに座り、ご馳走に舌鼓を打つ。回りはシャクナゲの花で一杯。その花の下で昼食である。贅沢極まり無い事である。ああ！こんな贅沢なトレッキングが出来るなんて、まるで大名山行である。何時もの乞食山行と比べると、雲泥の差で有る。始めて来てこれでは病みつきになってしまうと、心から底から思ってしまった。

このパーティーも年齢差は有るもののまるで前か

ら知っていた様な、何の違和感もなく馴染んでしまった。それも成田空港からである。人見知りな私には考えられないことであった。来る前は一人での参加に心配したのであるが、（現地で売り飛ばされたらどうしようかなと思ったけどね..）飛び込んでしまえば、どうにかなるようである。

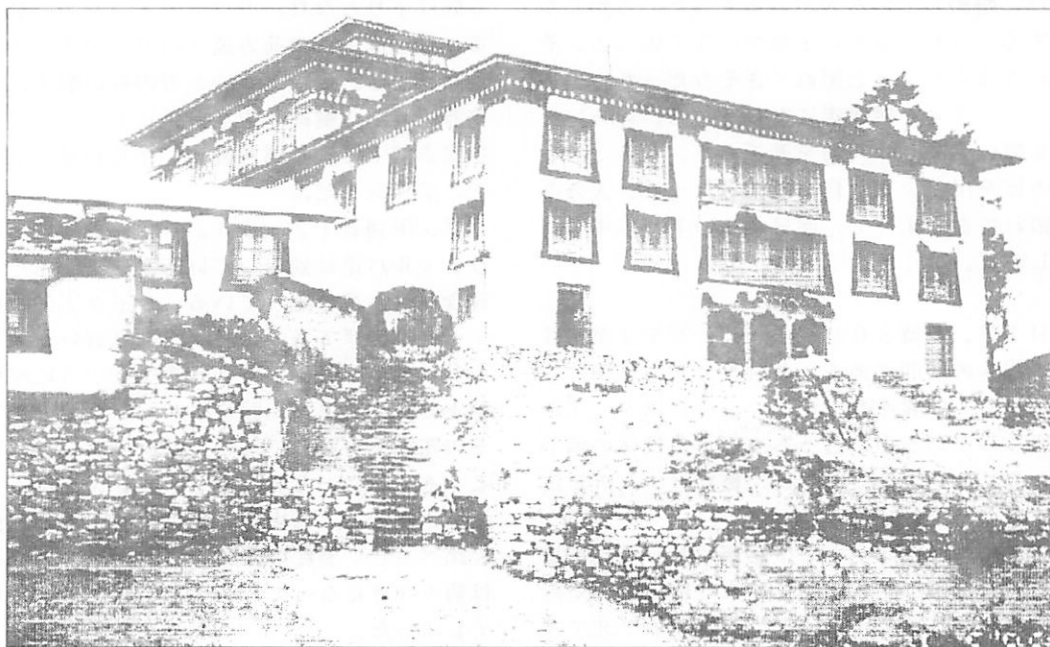
ナムチェにも有ったのだが、数基の小さなチルド（水車）がカタカタ音をたてて回っている。これは脱穀用ではなく、経文を納めた円筒を時計回りに回す信仰用のものである。これを回すことによって経文（経文が読めなくても）を読んだと同じ効果があると言われている。

ブンギ13:00発。ここからは標高差約600mの登りが待っている。最初は急登で有る。急登なので、休み休み登って行く。ペース的に楽な登りであった。それも1時間もしないうちに緩やかになり、樹林が開けた展望地といった感じの所に出る。視界が良ければ、最高なのだが相変わらず曇っている。もう一頑張りとして登って行く。高度的にそろそろかなと思っていて、いきなりカンニ（仏塔門）が出てきた。そこをくぐり抜けるとすぐに台地に飛び出した。そう、ここがタンボチェ（標高3867m）。

15時15分タンボチェに到着。台地に出ると視界がぐっと広くなり、目前にはタンボチェのゴンバが本当にすごい迫力で圧倒される。（ゴンバは以前消失してしまったのだが、92年再建されたそう）本当に素晴らしい。曇っているが、360°すべて見渡せる。ゴンバのすぐ後ろにクーンピラの一部が見える。すぐそこにある。雲が

取れば、その左側からクワンデ、タムセルク、カンテガと、見え北側遠くにローチェ、エベレスト、ヌブチェ、凄いとしか言いようがない景色が見られるだろう。もっとクリアーになるれば絶景ということになろう。それはこの世の物とは言えない。もう、それは、シャングリ・ラ（理想郷）である。景色に圧倒されながら、キャンプ地まで行く。もうすでに黄色いテントが張ってある。早速お茶が出され、ビスケットとともに頂く。テントに荷物を入れ、ビデオ&カメラを持って北の尾根に上がる。待つ事1時間余り。もうネパールに来て待つことは何とも思わなくなった。待っていればいずれは素晴らしいことが有ると思うからである。その思いが天に通じたのか？一転して私の目には素晴らしい光景が写し出されたのである。雲が晴れ360°全ての山々がその全貌を表わしたのである。クワンデ、タムセルク、カンテガと見え、北側遠くにローチェ、エベレスト、ヌブチェ。その手前にアマダブラム、タウオチェ。ゴンバの後ろに、クーンピラ、ギャジョ・リとそれはそれは……。まさにシャングリ・ラである。梶山さんの話では、今の時期にこんなにクリアーに見えるのは本当に珍しいとの事。一重に皆の行ないが良かったためだろうと勝手な解釈をして感心した。素晴らしい光景はまだ続く。この後夕日を浴びて光るエベレストが見えたのだ。今まで幾つものこういう光景を見てきたが、落日に映えるエベレストは、山を愛する者ならば、感極まるものだろう。

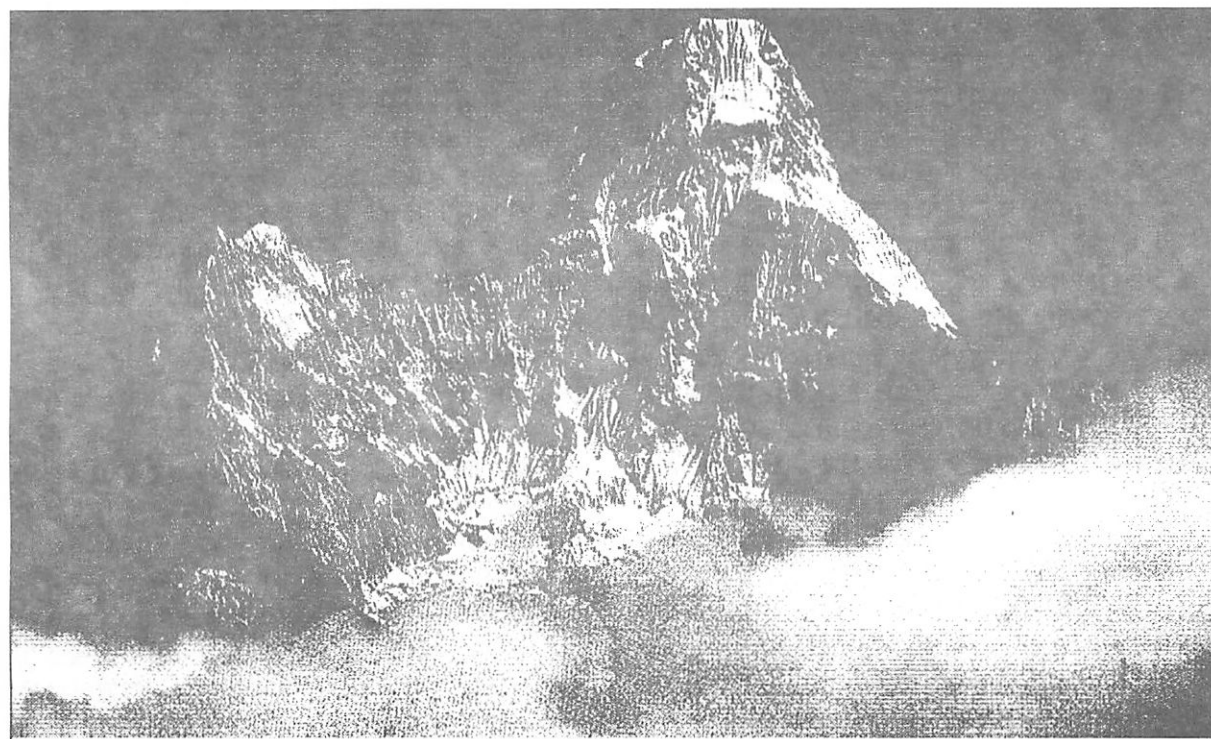
ようやくここで、今までの謎が解けた気がする。



タンボチェのゴンバ



タムセルク&カンテガ



全貌を見せるアマダブラム

ず〜っと私を呼び続けていたのは、エベレスト。そう、チョモランマである。あいつが俺を呼びつけていたのだろう。（これも勝手な解釈であるが…？）そして、その光景もクライマックスを迎え静かに光を失っていったのであった。

そんな光景をビデオの納め、テントに戻ると大変な事態になっていた。私達のパーティの吉田さんが、高山病にかかってしまったようで、極めて危険な状態であった。酸素を吸入し、チューブテントとクマールに付き添われ、背負われてプンギまで下ろされていった。ちょっと心配になったが、クマールが戻ってきて話を聞くと、プンギに下ろすと大分落ち着いたような事を言っていたので、安心した。

5月2日。6:00起床。テントの外は、ガスっていて視界が10mも無い。まあ、今の時間は仕方ないかな。そのうち良くなるさと楽観的である。ちょっと寒いのでセーターを着込む。

6時30分、朝食を取り荷物をまとめる。出発の前にゴンバを見学に行く。まだ若い修行僧がお経を唱えている。朝のお勤めである。まだ6〜7歳ぐらいの子供もいる。気になるのか？たまにこ

話しかけたりと大分慣れてきて、私が物陰に隠れると、探しに来るといった愛嬌のある可愛い子であった。私があげた板チョコを大事そうに持っていたのがとても印象に残った。しかし私は板チョコをあげてから、失敗したなと思った。ここでは歯を磨く習慣はないかも知れない。虫歯にならないかなと心配になってしまった。

サナサ発、12:30。クムジュンまでちょっときつい登りである。しかしさっきの事（板チョコをあげた事）が気になって仕方がなかった。虫歯になって泣く光景が、頭を離れなかった。私の知慮の無さを痛感してしまった。後悔しても行なってしまった事は仕方ないと自分に言い聞かせ、後はあの子の母親に全てを委ねるしかない、と思う事にした。

クムジュン着、13:25。このクムジュンは、この地域では珍しくハイスクールが有るということだ。その奥のクンデにはヒラリーが作った病院が有ると云うこと。今までの集落と違い、町といった感じが本当にする。そんな景色の中を馬に乗りやってくる集団が有った。望遠鏡で見ると吉田さんだ。前後にシェルバを従え、こちらに登っ

ちらを伺っている。そんな荘厳な雰囲気を感じながらゴンバを出た。

タンボチェ8:10、出発。来た道をプンギまで戻る。

プンギ到着、9:21。早速、吉田さんの容体を聞くと、近くを散歩しているという。みんなとお茶を飲んでいると、吉田さんが現れた。体の具合も大分良くなっていた。彼の話の聞くと、背負われて降りてからも、酸素吸入したりで、最初は辛かったがだいふ楽になったと。使わなかったがガモウバックも用意してもらったと云う。シャンボチェまで背負わせてくれとシェルバに頼まれたが、何か悪く感じて馬を雇ったという。これから先はそれに乗っていくとの事。何はとあれ元気で良かった。

プンギ発、9:40。プンギからはサナサ経由クムジュン、エベレストビューホテル、シャンボチェへと戻る。

サナサ着、11:20。ここで昼食になった。昼食後、表のお土産を見ていて、ここの子供らしい6歳の少女と仲良しになった。とても可愛くて、目を合わせると持っているバックで顔を隠すが、またチラッとこちらを見るといったお茶目な子で、

てくる。やはり馬は早い。らくちんそうである。『ラクチンですね、おしりは痛くないですか？』『吉田さん、様になっていますね、カッコイイですね、私と替わりませんか』と和気相合な会話を交わし、その馬の後を追いかけるようにエベレストビューホテルまで登って行った。

エベレストビューホテル到着、14:10。念願のエベレストビューホテルに着いた。早速ホテルに入り、休憩である。さてホテルでトイレを借りようと場所を聞くと、外に有ると云うので、行くと鍵がかかっていた。使っているのかなとホテルに戻り、フロントでマネーチェンジしてもらっていると、湯本さんが鍵を片手に来た。湯本さんの話を聞くと、フロントの横の鍵でトイレを開けて使うそうだ。『???何だ?』どうして鍵をかけるのか分からないなあ。と首を傾げながらトイレまで向かう。お金をルビーに代え展望室で、念願のコーヒーを飲む。ここでエベレストを見ながらコーヒーが飲みたくて来たのである。残念な事に今日はエベレストは見えないが、雰囲気は最高である。BGMにエンヤのTHE MEMOR Y. OF TREESとかユーミンのロンドの曲が

あれば最高である。贅沢な一時を過ごし、15:35、エベレストビューホテルを出発。シャンボチェまでは30分ぐらいである。

16:05、シャンボチェ到着。今晚は泊まりたい人は（自己負担であるが）ロッジで泊まっても結構だと云うのでロッジに泊まる。湯本さんと一緒に二人部屋泊まり、早速ビールで乾杯。一階の部屋なのでみんなが集まって大賑わい。二階の部屋は電気が点くのに、この部屋は電灯が無い。なのにブレーカーだけはあつた。どうして？。しかしそんな事はもう何も気にならない雄大な気持ちになっていた。

今日は最後の晩餐？そう、シェルパ達ともいよいよお別れだ。夕食後、打ち上げパーティを開催した。歌は出るは、踊りは出るはで、愉快だった。歌はネパールの歌（シェルパソング）と日本の山の歌の歌い比べになった。『イエ〜ィ、レッツ、シェルパソング、レッスンピリリ、レディゴー』てな事で、シェルパ達が歌い出す。踊り出す。彼らが終わると我々も『山よ、岩よ、我らが宿り、俺たちや…………』と歌い出す。そんな華やかさに引かれたのか、違う他のシェルパも入ってきて一緒に歌い出す。元来、彼らは陽気な民族なのだ。

である。そう、吉田さんは何と大枚2万円を出してエベレストビューホテルに泊まったとの事である。ちょっとうらやましく思った。朝食後の運動ともう一度尾根に登ってエベレストやアマダブラム、タムセルクに“さよなら”でもいってこようかなと登り出す。が、シェルパ達が何やら下で騒いでいる。クマール等が追ってきて、降りろという。良く聞いてみると『ヘリが来るから、そのヘリに乗ってくれ』と言っている。如何してだと下に降りると、まだ8時前なのに一番便のヘリがやってきた。ヘリポートにはテュブテンいて、彼の話だと『一番便のヘリで一応ルクラまで降りていてくれ』と言っている。『雲が出てきたし、視界が無くなくなったら欠航になるかも知れないから。ルクラからならここより、欠航に為らないから。ルクラには私どものエージェントがいます』と説明しているが、でも梶山さんが吉田さんを迎えに行行って帰っていない。『どうするんだ』と、みんな。すると、『2便目で、梶山さん、吉田さんに乗せ、あなた達を必ずピックアップします、だからとにかくヘリが飛ぶうちに乗って降りて待っていて下さい。』と、緊急な事態だと感じ、みんな

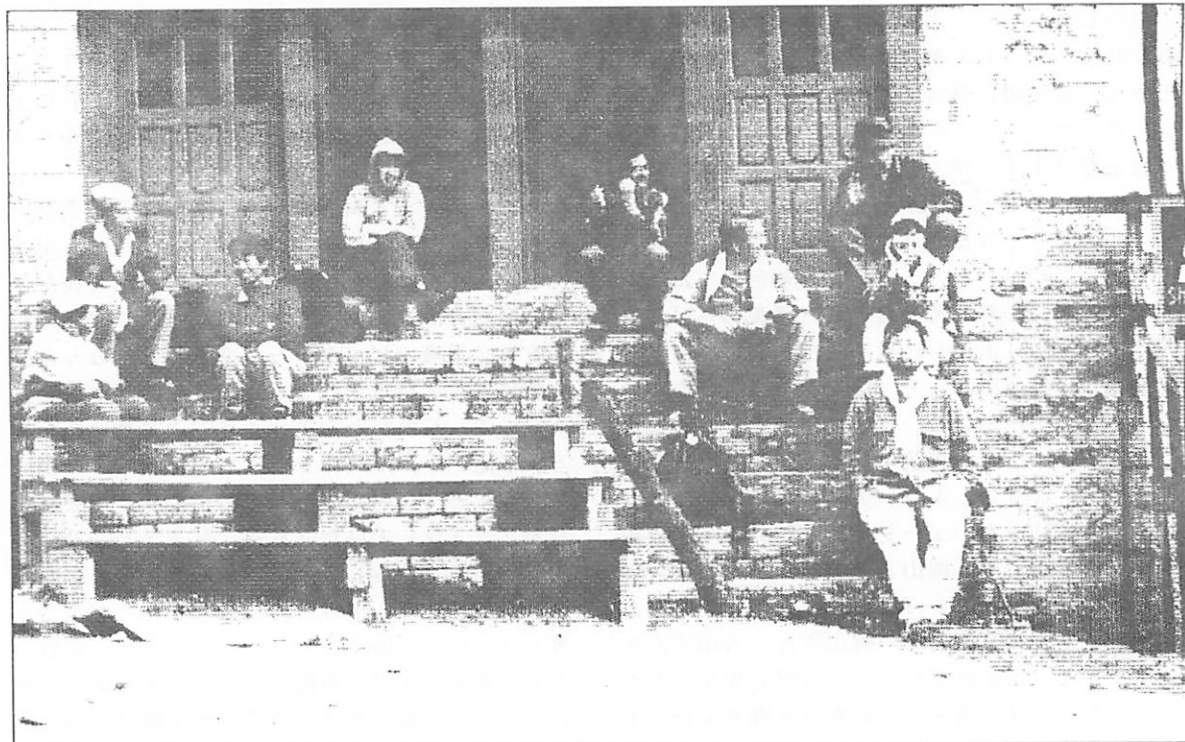
AM8:05。シャンボチェよりテイクオフ。二人と別れるのはちょっと心配だが、ここにいて欠航になったら仕方ない。10分ぐらいでルクラに到着。

ルクラ到着、AM 8 : 15。テュブテンの話の通りヒマラヤン・ジャーニーのエージェントが我々を出迎えてくれた。何でもルクラの前村長だと言う話だ。ツアーリーダーとはぐれてしまったが、じきに2番機でピックアップされると、みんな樂觀的に考えていた。ヘリが来るまで時間が有るようなので、折角だからとルクラ村の見物に出かける。予定にない所(ルクラ)に来たので半分儲けたように思っていた。ここでも、お土産屋を見たりとブラブラしていた。私は、ちょうどルクラの空港の上の見晴らしの良いレストランの外に有るテーブルの所で、中谷さん、保田さん、北条さん等とコーヒーを頂く。しかしこのコーヒーが旨くない。まあ15円じゃ仕方ないかなあとかきらめた。ここから見るルクラ空港の滑走路は、谷に向かってあり、下り坂になっている。飛び立てない

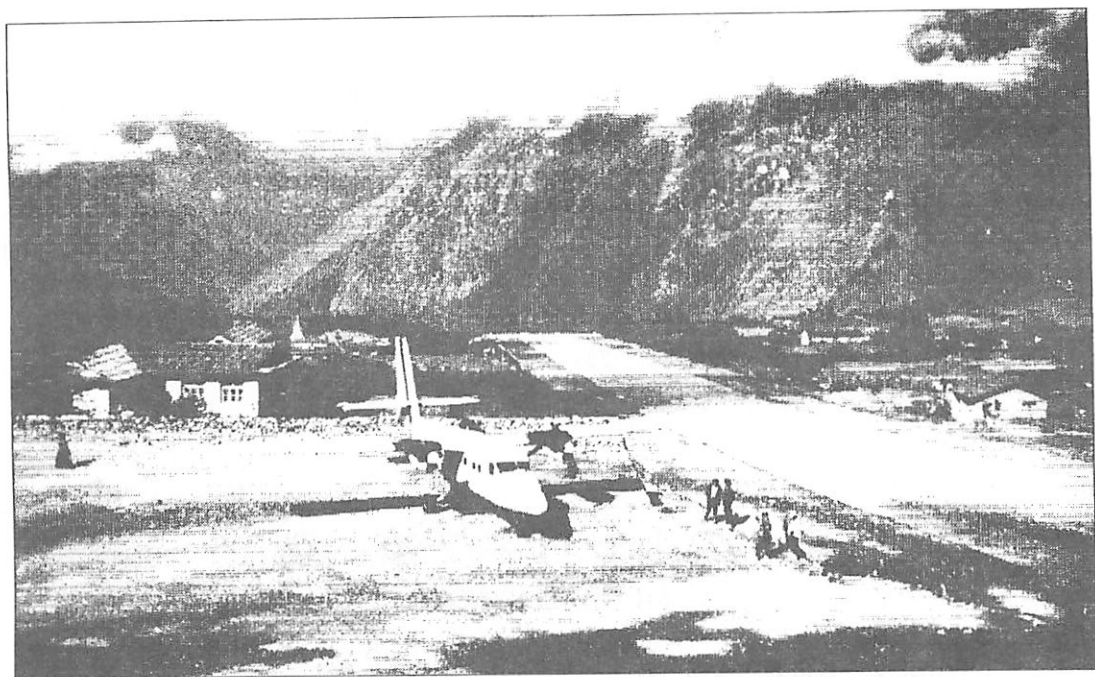
と谷に落ちてしまう。まるで航空母艦から飛び出すようで見ていても恐くなる。そろそろ時間かなとアシアンエアーの所に戻る。サガルマータレストランの前で座りながらヘリが来るのを待つ。しばらくしてヘリの音がした。『何処だ』と見るとそのヘリは、カトマンドゥから上がって来たやつだった。これからシャンボチェに行って帰って、我々をピックアップしてくれるのかなあと見ていた。とにかくヘリはエベレストエアーとアシアンエアーが有り、エベレストエアーのヘリは何回かルクラに降りて来たのだが、アシアンエアーは降りて来ないのだ。そうしてやっと待望のアシアンエアーのヘリが戻って来た。『お〜い！ここだ早く来いよう〜！降りて来い〜来い〜！』とみんなの声。皆じつ〜とヘリの動きを目で追っている。と、どうもヘリの動きがおかしい？。『おい、おい、そのままじゃ、ここに降りられないぞ、進入角度を変えろ！』。と、みんなの声。しかし段々みんなに絶望の色が見えてきた。そんな思いも知らず、ヘリはそのままカトマンドゥ方向へ飛んでいってしまった。『お〜い、どうしたんだよ、この次のヘリかよ。がっかりさせるなよ』と云った感じがみんなの思いだったろう。その後、待てど暮らせどヘリはやってこなかった。ヒマラヤン・ジャーニーのエージェントの話だと、さっきのヘリで梶山さん吉田さん等はカトマンドゥに行っ

ってしまったと言う。『本当かよ』全くどうするんだ。ここに降ろした事はそちらの配慮だからとヒマラヤン・ジャーニー持ちで食事とここの宿泊は持ってもらった。宿泊は男連中は、ドミトリーいわゆる大部屋である。そこに荷物を置き、レストランに行く。レストランで、もうこうなったら開き直るしかない、ビールを飲む。明日の一番機に乗らなければ、飛行機に間に合わない。当然日本に帰れなくなる。不安半分、これからどうなるか期待半分である。私はこっち（ネパール）にもう少しにいたい気持ちも有る。そんな気持ちでビールを飲んでいると、いきなりドアが開いた。そこには何とクマールがいたのである。シャンボチェからルクラまで歩いてきたと云う。恐ろしい速さである。サーダーのテュブテン等は明日のヘリの調整をしているとのことだった。

5月4日。晴れ。5時半に起床した。今日遅くてもAM10時までにヘリが来なければ、万事休すである。日本への飛行機は、13時40分発なのだから移動時間を考えるとシェルパホテルに預けてある荷持をカトマンドゥ空港まで運んでおいてもらわなければ間に合わない。朝食を済ませ、後はひたすら待つのみ。まず一発目、エベレストエアーのヘリが来た。どうしてかは知らないが、エベレストエアーは頻繁に来てるように思う。今



サガルマータレストラン前で待機状態（ヘリが来ないよう！）



ルクラ飛行場の滑走路（航空母艦からのテイクオフするみたいだ！）

度来るときはエベレストエアードানাと固く心に誓うのだった。そうこうして待望のアシアンエアのヘリが来た。こっちに進路を変えてくれとお祈りしてしまう。やったあ！降りてくる。

午前9:00、ルクラをテイクオフ。トレッキング中は本当に恵まれ過ぎる程よかったのだが、下界に来てアクシデントに遭遇するとは、いやはや、やはりネパールである。カトマンドゥ空港に無事10:10到着。ヘリポートには、笑顔一杯で出迎えに来ている梶山さんの姿があった。再会の喜びも束の間、これからが大変だ。なにしろ時間が無いのである。シェルパホテルに戻り、荷物を整理し、30分でお土産を買い込み、空港にとんぼがえり。そして搭乗手続きを済ませる。シャワーを浴びたかったがそんな暇は無かった。スクランブル・ダッシュと叫びながらそのまま搭乗。13:40、カトマンドゥをテイクオフ。そして18:10、バンコクに着いた。早速ホテルでシャワーを浴びる。ふう、生き返った。そしてビールを飲んで、その夜は唯ひたすら寝るだけ（何処にも遊びに出かけませんでしたよ……。）

バンコク7:35、日本に向けテイクオフ。今日はとても早起きでしたので、眠くて眠くて。飛行機の中で充実に満ちた山旅の夢を見ながらグウグウ……でした。

成田15:55、到着。本当に楽しいトレッキングでした。これで今回も終わりにになりました。旅は始まるまでの計画、そして旅の間は楽しいん

ですが、終わってしまう何か心が寂しい。まあ、それも明日からの活力に変えて、次の山旅の計画に夢を持ちながら、これからの生きていく訳なんです。

でもネパールはとても気に入りました。現地の人との交流、チベット仏教とかが面白かった。また彼らの生きざま、どんな民族でもみな考えている事はそんなに変わりはないと、改めて感じました。山も楽しいかったし、ネパールの民も私には合いました。もう少し英語の勉強でもしようかなとまた思ってしまった。でも日本に居ては、なかなか身に付かないと思いますがネ。

では、これにて波乱万丈だったクランプ山群トレッキング。憧れのチョモランマ&ナムチェ・バザールの報告を終わります。

ps…次は、デマバンド峰（5671m）にでも行って、5000m以上の高度を体験して来ます。そしてキリマンジャロ、マッキンリーと五大陸最高峰登頂へ、いやいや七大陸かな？と夢を広げて。その時が来たらまた、報告します。

では…、インシャーラー。

4 / 27

成田(10:00)ーバンコク(14:40)

4 / 28

バンコク(10:30)ーカトマンドゥ(12:35)

4 / 29

シェルパホテル(7:00)ーカトマンドゥ空港

(7:20~10:50) - シャンボチェ (11:50~12:10)
 - ナムチェバザール (13:10)
 4 / 3 0
 ナムチェ・バザール停滞。
 5 / 1
 ナムチェバザール (07:57) - プンギ (12:00~
 13:00) - タンボチェ (15:15)
 5 / 2
 タンボチェ (08:10) - プンギ (9:21~9:40) -
 キャンズマ (10:20~10:40) - サナサ (11:20~
 12:30) - クムジュン (13:20~13:40) -
 エベレストビューホテル (14:10~15:35) -

シャンボチェ (16:05)
 5 / 3
 シャンボチェ (8:05) - ルクラ (8:15) - ルク
 ラ停滞。
 5 / 4
 ルクラ (9:00) - カトマンドゥ (10:10) -
 カトマンドゥ・トリブバン空港 (13:40) -
 パンコク (18:10)
 5 / 5
 パンコク (07:35) - 成田 (15:55)

(生井 記)

遠くの山シリーズ第一弾

(利尻山南稜)

1996. 5. 2~6

パーティ L古山正文、告広通、本図一統

私は爽やかな海風を全身に受けながら、パイプを片手に甲板に立っていた。正面の北の海にそそり立つ円錐の鋭鋒を眺めつつ、これから登る南稜のタクティクスを思案していた。傍らにはロングヘアーのちょっぴり日焼けした丸顔のグラマラスな女性がいた。「かつちゃん(俺のこと)、ゆうべの札幌は楽しかったね」「うん、あの一万円のウニ丼もうまかったなあ」「そうね、ところで私に利尻山登れるかしら」「だいじょうぶだよ、俺が命をかけて守るからね。万が一死ぬときは一緒だよ」「ほんとっ!うれしいわ」「帰りは寝台特急北斗星で帰ろうか」「うん、それがいいわね」「寒くないかい」「だいじょうぶよ」そっと彼女の肩に自分の上着をかけてやった。2人は心底愛し合っていた。……。私が利尻山に登るときはこんな筈であった。

2日。重い雲が天一面に広がった稚内空港に降り立ったのは、お昼もはるか過ぎた2時頃であった。空港からフェリーターミナルに向かうバスから見る景色は初めての北海道である。私はかなりの空腹を覚えていた。飛行機など減多乗ったことのない私は、機内食が出るもんだと勝手に思い込んでいたが、あさはかだった。待ち時間を利用して、フェリーターミナルの前のお土産屋に飛び込み、ウニ丼弁当を注文した。これは笹平が“北海道のウニ丼はウニが2段重ねで旨いですよ”と言っていたのを覚えていたからだ。店員がどちらからいらっしやいましたか、と聞いてきた。“フロ

ーム ジャ???、いや茨城からです”どうも飛行機など乗ってしまうと外国に来たような気がしてしまう。田舎者は困ったもんだと苦笑する。

甲板から見えるはずの円錐の鋭鋒は雲の中どころか、風雨で甲板にも出られない有り様であった。パイプではなくマイルドセブンを吸っていた。傍らにはいるはずのロングヘアーの女性の代わりに、どんくさい男が5人もいた。一万円ではなく二千円のウニ丼だった。夢と現実のあまりにも大きいギャップに、がっくりと肩を落としていた。ウニ丼を食べようとしたとき思わず“笹平のばかやろ”と、どなった。二段重ねどころではなく、お情け程度しかウニが入っていなかったのである。まったくチョベリバであった。

鴛泊港は嵐の中で手荒い歓迎をうけた。予約をしておいたタクシーに乗り、名前だけのスポーツ店からガスボンベを受け取り、鬼脇に向かう。私はなぜかノスタルジーを感じていた。北海道は初めてなのだが、以前来た事があるように思えた。なぜだろう。そうだ、ナホトカだ。ナホトカと似ているんだ。26年前、一人でシベリア経由で渡欧するとき見た景色を思い出していたのだ。

林道を少し入った所でタクシーは止まった。利尻も今年は雪が多いらしい。雨の中、幕営地を探して少々歩く。雪の平地を見つけ今日の行動が終わった。明日の天気予報は雨とのこと。少しの雨では行動せねばなるまい。なんせ金がかかっているんだから。

3日。雨の中のテント撤収。憂鬱な気分です。まだ利尻山は全容を見せてくれない。大きな堰堤の所で東稜パーティと別れる。頂上での再会を約束しガッチリ握手。お互いガスの中に見えなくなるまでコールを掛け合った。この連休は南稜も東稜も我々のパーティだけのようだ。6人から3人になると急に寂しさを覚えた。十分すぎる程調べてきたのでガスの中でもルートの不安は無い。雪壁から雪稜を辿る。すでに3人共下着まで濡れて寒さを感じている。今日は早めにピバーク地を求めたいところだ。1300mピークを過ぎると痩せ細った岩稜になってきた。いよいよ南稜が本性をむきだしてきたのだ。岩稜はプツンと切れて、懸垂しなければ進めない。登攀用具を身につけ、下降にうつる。ザイルの回収が難しそうなので、一人が降りる度に確認していたのだが、結局回収できず登り返すという失態をしてしまった。稜線通しには行けず左側に行く。最低コルは気がつかず通過してしまう。すると岩稜にポツカリと風穴があいており、そこに絶好の幕営地があった。そこはここで泊まらなければバチがあたるような自然の平地であった。後で分かったことだが、この先P1P2コルまで幕営適地はなかったのである。時間は早い今日はここまでで十分だ。強風でもテントが飛ばされないよう、しっかりしたブロックを築き上げる。テントが張り終わり、中に入ったら、なぜか急に風が止みガスが晴れてきた。

すると、オーイオーイと声が聞こえるではないか。外にでてみるとヤムナイ沢をはさんで東稜パーティが手を振っていた。東稜パーティもこちらと同高度まで登っているようだ。ガスはみるみるうちに消えて、上部が見えてきた。百m以上もあるかと思われるローソク岩南面や、大槍、バットレスが見える。これだ、これが見たかったんだ。日本離れしたこの風景が見たくて遥々ここまで来たのだ。1時間程、表で写真などを撮りながら過ごす。

4日。今日は頂上アタックなので早起きする。早朝からサラサラと音がして気になっていたが、新雪が10cm程積もっている。でも〇〇がかかっているのだから今日も出発する。傾斜は増し、大槍に向かって雪壁、雪稜、ナイフエッジとラッセルを続ける。天気は回復し青空が見えてきた。東稜パーティがハイペースで登っているのが見える。新雪の状態は最悪で、もっと積雪が多ければ行動することは自殺するに等しい。足元から雪塊を落とすと雪崩がどんどん誘発する。マオヤニ沢では新雪表層雪崩のオンパレードだ。小規模ではあるがあまり気持ちの良いものではない。ラッセルは2人に任せて私は写真を撮りながら後からついて行く。大槍は右の凹角から2ピッチと少々でP2とのコルに着く。この辺りの景色はシャモニ針峰群のようで実に格好が良い。P2へはリッジ通しに45m一杯。P2は3人がやっと立てる

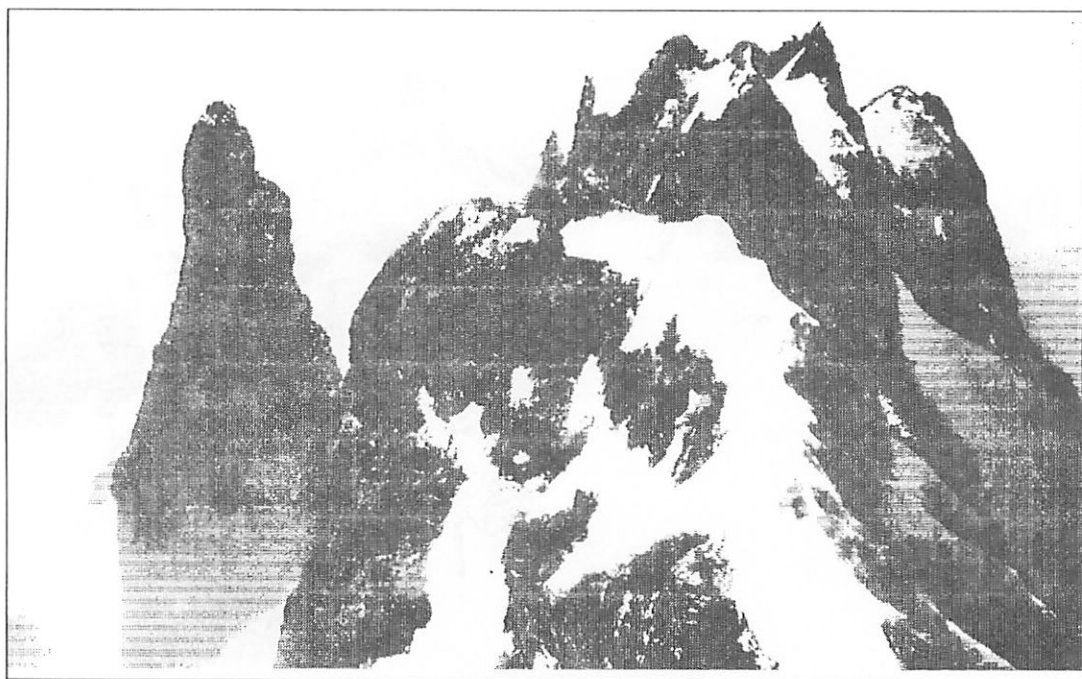


利尻山南稜を登る。(ローソク岩・大槍・バットレスをバックに)

広さしかない。P2から見るP1とバットレスはかなりの迫力で、いったい何処を登ればいいのか、不安になる凄さでせまってくる。P2から懸垂で2ピッチ降りるのだが、尋常な懸垂ではない。いったい支点を何処にとつたらいいだろう。周りは泥壁で支点の取りようがないではないか。うっかり西壁に振られたらもう戻れない。偵察に偵察を重ね慎重に降りた。今までの登山人生の中で一二を争う悪い懸垂であった。P1P2コルに降り立つまで下降に約1時間を要したが、その頃天気が急変し、またガスと強風に包まれてしまった。ザイルを回収すると、もう戻ることはできない。前進あるのみである。妙な孤立感におそわれる。西壁にパーティがいるらしくコールが聞こえてくる。面白いことに、そのパーティの声が聞こえるだけで孤立感は薄らぐのだった。P1はフィックスザイルで通過すると、いよいよ最後で核心部のバットレスである。連休前半の好天で壁の雪は落ちており、アイゼンを外すか迷ったが、結局つけたまま登る。しかしボロボロで手がつけられない。一番堅そうな所を選んで告がリードする。ラクがバンバン来る。強風とガスで何も見えず、やたら寒い。さすが北海道だ。ザイルがクラックにはさまり動かなくなるといったハプニングもあり、時間がかかったが無事通過する。私は仙法志稜も登ってみたいと思っていたが、又ここを登ることを考えたら、もうたくさんという気持ちになってい

た。バットレスは5ピッチで終了した。バットレスの頭で交信しようとしたが取れなかった。とにかく寒いので先を急ぐ。南峰手前に祠があり、その近くの雪洞に誰がいるようだった。東稜パーティのトレールは南峰に続いており、すでに先行していることがわかった。南峰へはザイルを出して1ピッチ岩場を登る。この時不思議なことに、我々が頂上に立つのを待っていたかのように急に晴れだしたのである。ブロッケンも我々を出迎えてくれた。雲に写る影利尻も我々を歓迎してくれた。チョベリグとはこのことだ。しかし東稜パーティが心配しているだろうからゆっくりもしてられない。告はビパークできそうな所があると“あそこ快適そうですね、北峰までは随分ありますね”などと言っている。気持ちはわかるが東稜パーティと連絡がとれていないのでビパークする訳にもいかない。聞こえないふりして無視する。北峰は360度の展望で礼文島、稚内まで見える。ここで無線が通じ、東稜パーティは避難小屋にいますという。我々のスペースも確保してあるから早く降りて来いとのことであつた。風は強いが北国の日光を全身に浴び、寒さなど気にならない。それではポチポチ降りるとしよう。小屋前で名雪氏、澤田、紺野が出迎えてくれた。頂上では会えなかったが、お互いの無事を確認し健闘をたたえあつた。仲間とは本当にいいものだ。

5日。快晴の中、鷺泊に下る。フェリーに乗る



南稜から仙法志稜を望む

まで2時間あるのでウニ丼を食べることにした。最初入った店でメニューを見たら3800円。ビールだけを飲んでイソイソと逃げ出す。次の店では3500円。この位が相場らしい。その店でビールを飲み始めると、そこのおばちゃんがウニのうんちくを語り始めた。今のウニは地元で捕れたものではなく、ミョウバン漬の輸入物であること。地元のムラサキウニは6月でないと捕れないこと。だから東京で売っているウニとそんなに変わらないこと。これを聞いた途端、私は刺し身定食を注文していた。フェリーに乗るころには雲が湧き、ついに北海に浮かぶ円錐を見ることができなかった。稚内では宿を探さねばならない。古山CLは稚内で幕営すると言っていたがなんとか説得する。フェリーターミナルの前に民宿があったので聞いてみると6500円とのこと。3500円に値切るべ、と告にアタックを命じるが5500円で手を打ってきた。ウーン、隣の全日空ホテルよりは落ちるけど、ビールの味は変わんねーだろ、と承諾した。この夜は嵐のような風雨になり、テントなど張っていたら飛ばされてしまっただろう。完登祝いではどれほど飲んだか、凄まじいものであった。その内の半分は南稜のリーダーが飲んだように思われる。

6日。今日は帰るだけなのだが飛行機は午後だ。レンタカーを借りてノシャップ岬と宗谷岬に行く。寒流水族館では念願のクリオネと対面できた。宗

谷岬の気温は2度Cで、風が強いため体感温度は-5度C位に感じた。サハリンが雪をつけているのが見えた。ここまで来たら、ついに名雪氏が発病してしまった。東京から持ってきた神風の鉢巻きを締め、特攻隊の歌を歌いながら、天皇陛下万歳を始めたのである。心配していたものが出てしまった以上しかたがない。遠く離れて全然関係ない振りしているほかない。名雪氏の病気はさらに悪化し“サハリンは日本の領土だ。サハリンをロシアから奪い取れ”などと怒鳴っている。もう恥ずかしいったら、困ったもんだ。でも、サハリンは別として北方領土返還については私も考えは同じである。

最後にとっておきの店を紹介しておこう。稚内市内から稚内空港に向かう道の市内の外れの辺り、右側に「やまちゃん」というラーメン屋がある。この冰雪ラーメンがお薦めだ。海の幸がてんこもりに入っていて値段はたしか1200円だと思った。値段だけのものはあった。この冰雪ラーメンに挑戦していたら出発までの時間がなくなり、紺野運転のレンタカーは、A1顔負けのスピードで空港に向かったのであった。今思えば今回の山旅で一番恐ろしかったのはこの時だったような気がする。

帰りの機内から雲表の利尻山がちらっと見えた。感動的であった。



利尻山北峰にて

5月2日

タクシー降車(17:26) - 幕営地(17:47)

5月3日

幕営地(6:28) - 大曲堰堤(8:22~8:45) - 1200
mピーク(11:37) - 幕営地(14:02)

5月4日

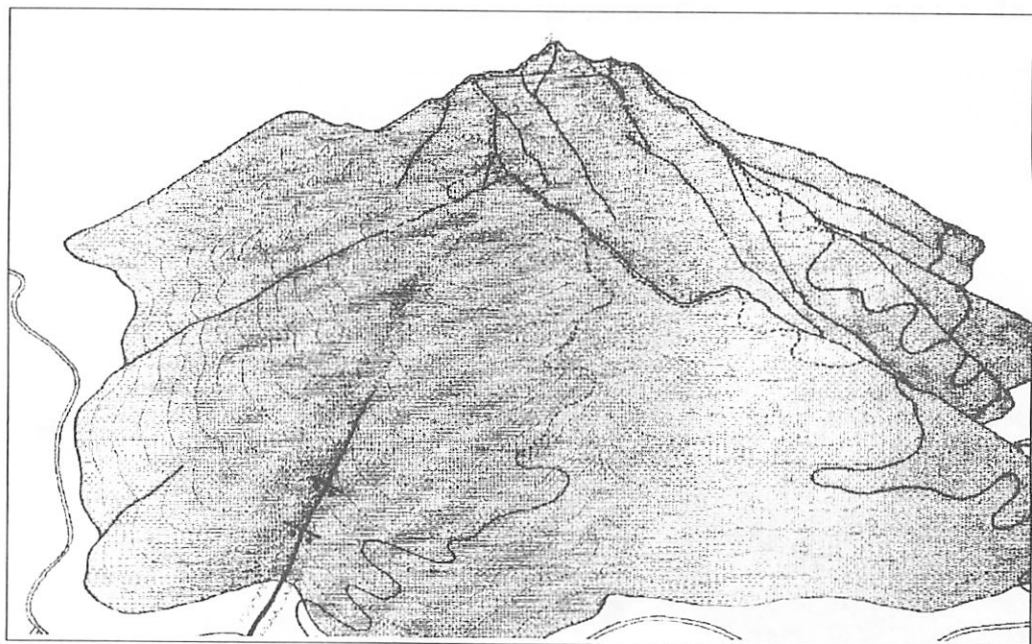
幕営地(6:14) - P1P2コル(11:37) - バットレ
スの頭(16:00) - 南峰(16:42) - 北峰(17:00~17:17)
- 利尻山小屋(17:51)

5月5日

利尻山小屋(8:28) - 鵜泊港(10:13)

(本図 記)

自宅に帰ると大騒ぎになっていた。利尻富士町
駐在所から“この連休に10パーティが利尻山に
入ったが、一番困難なルートに入ったおたくのパ
ーティだけが下山していない”と連絡が入ったん
だそうである。代表宅には下山報告をしておいた
が、駐在所からの連絡のとき代表宅は不在だった
そう。今まで関東近辺で下山報告という習慣が
なかったのも、そのまま帰ってきてしまった。駐
在所にはえらい迷惑をかけてしまった。すぐお詫
びの電話をした。こうして1パーティづつチェッ
クをしてくれていることは、われわれ登山者にと
っては嬉しく、心強いものがある。本来ならば入
山届を出したら下山報告をするのが常識であろう。
これからは下山報告についても、登山者が少ない
山域では、なるべくするよう心掛けなければなら
ない。



利尻春合宿

利尻山・東稜

1996. 5. 2~6.

パーティ L 名雪博二、澤田仁、紺野哲雄

今回、僕は利尻に行ってきました。経験も道具もなかった僕は、雪上訓練を行ってもらい、山道具も買い5/2を向かえました。羽田空港に集合しまして、千歳〜稚内と飛行機を乗り継ぎ、フェリーで鵜泊りと利尻島に着きました。天候はと言いますと、強風に大雨、そんな中をタクシーで林道に向かいました。林道を少し行った林の中にテントを張り、小宴会をして就寝。

翌朝、6:00に出発しました。雨は相変わらず降っていました。林道から雪に埋まった沢を登り、8時をまわった頃に堰堤にでました。ここから左が南稜パーティ、右が東稜パーティと別れまして、山頂を目指します。僕は名雪さん、澤田さんと東稜を行います。一度堰堤の上から取り付きましたが、下の方が良さそうだと指示があり、再び堰堤下より稜線を目指します。稜線までは急なきつい登りだったと思います。上は広い丘状になっていて、尾根と平行するように這松が生えていました。これがなかなか厄介でして、行き場がなくなり松の中を歩く事が多くなり大変でした。稜線が二つに別れるところを左に行き、13:30頃1130m付近でテントを張りました。テントの中にいると外の様子が明るくなってきたので、

外を見てみると外は晴れてきていて、海まで見えました。南稜の方もよく見えて、名雪さんが南稜に向かって大声で呼びかけること、2、3回すると応答があり、南稜パーティの皆さんが手を振っているのが見えました。

翌日の朝を向かえますと、雪が降っていたようですが、天気は良く、6:30に出発しました。這松帯もぬけまして、この日は爽快な雪稜が続きました。11時を過ぎた頃南峰の取り付きに着きまして、休息をしているとだんだんガスがかかってきてしまいました。資料によると10m2pのやさしい登りというのを、今山行で初めてザイルを出し、目前の山頂へと向かいます。山頂では残念ながらガスで視界が悪い状態でした。そう云う訳で少し休んだ後北峰に向けて出発、12:30北峰着、それから北稜を小屋へと下ります。北稜は広い丘状で、横に何列ものトレールが付いていました。14:15に小屋に着きました。夕方に近づくにつれてガスが晴れてきました。やがて南稜パーティが下りてきまして、その姿はとても美しくカッコ良かったです。

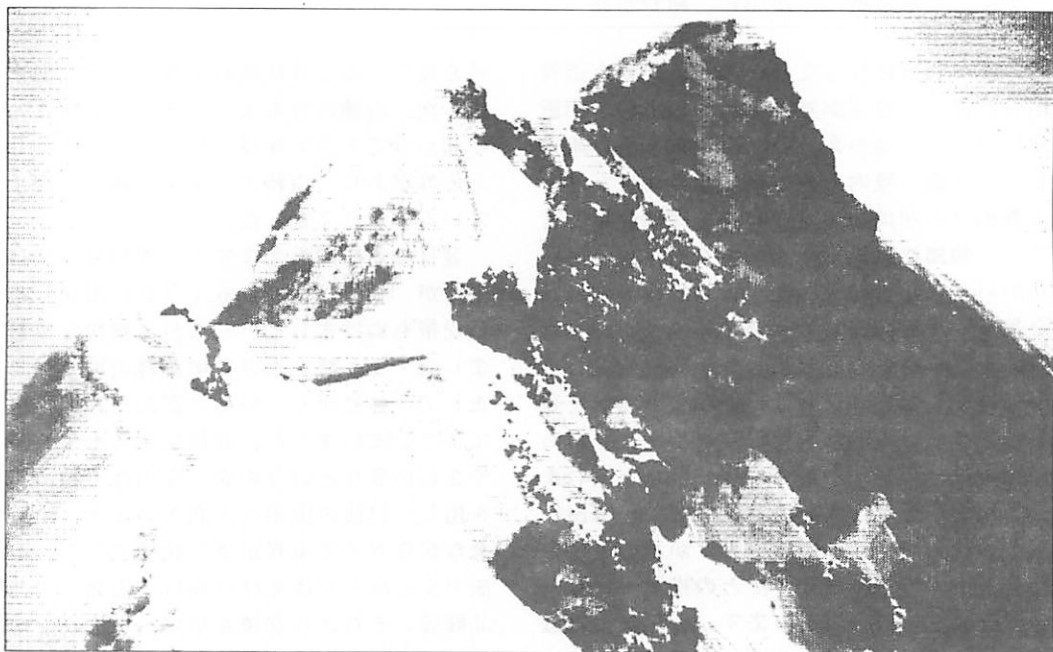
その夜は小屋に泊まり翌日下山しました。僕はすばらしい山行ができてとても嬉しく思っ



大槍P1、P2をバックに

います。皆さんどうもありがとうございました。

(紺野 記)



利尻山東稜

祝[㊦] 利尻山・南稜・東稜登頂



利尻山・全員無事集合

鳥海山スキー

1996. 5. 3~4

パーティ 中居康展（単独）

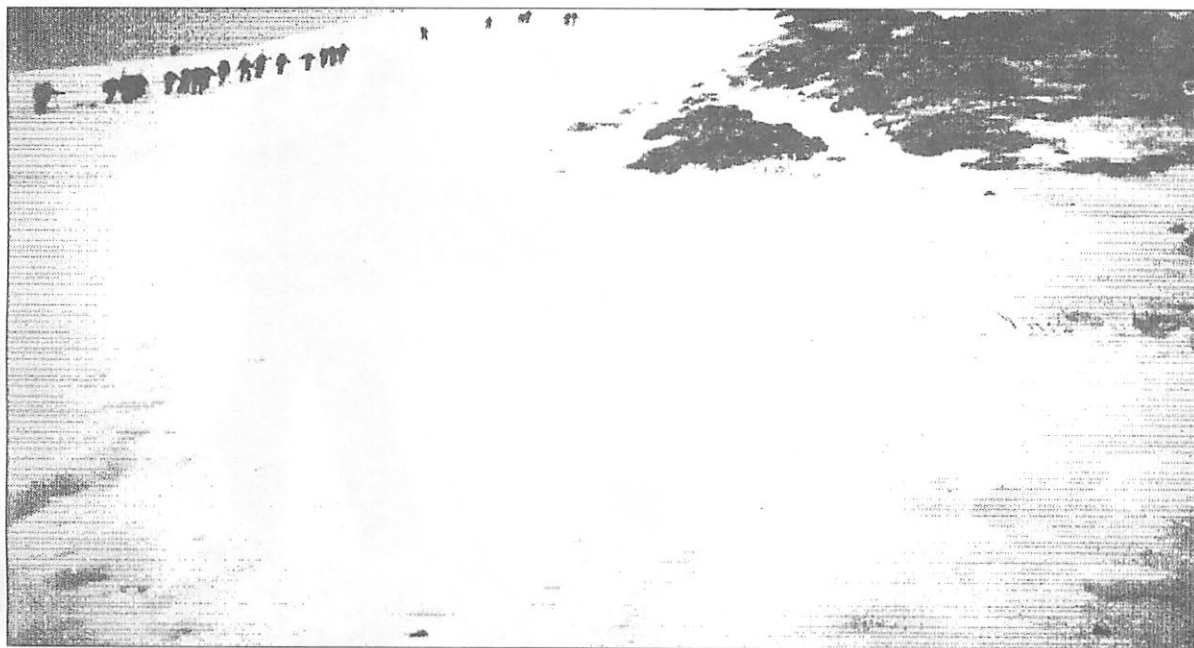
とにかく4月は忙しかった。なんだかんだで半分は病院に泊まり込んでの生活だった。さてゴールデンウィークである。例年この時期はとても忙しくとても休みなどは、という時期なのだが何と今いる病院ではこの時期に2日間の連休をくれるというのだ。この機会に山に行かないはずはない。ということで誰か相棒はいないかと古山さんに連絡したが、皆合宿で利尻に行っていまい誰も付き合ってくれそうな人はいない。しょうがないから単独で、どうせこの時期に行くならば山スキーがいい、ということで以前から気になっていた鳥海山に行くことにした。

直前まで病院で残った仕事をして、勿論いろいろな準備なんて気の利いたことはしないから、ベースワックスをかけたまま袋詰めにしてあるスキーを引っ張り出しワックス削りから準備が始まった。外は激しい雨だが、天気予報では明日は回復傾向でこの二日間は天気には恵まれそうだ。全ての装備を我が愛車バジェロに詰め込み、夜中の11時に北茨城を出発する。

磐越道から東北道に入るまでは順調であったが、郡山ジャンクションを越えた途端いきなりの渋滞である。交通情報では事故で二本松から福島西ま

で通行止めという。しかし高速道を下るのもままならず、夜が白々と明けるまで渋滞の中を延々と待つ羽目になってしまった。山形道から国道13号に乗って北上する。はっきり言って恐ろしく遠い。手前の国道が雪で通れず、更に大回りで鳥海山の麓にたどり着く。当初に目的としていた、百宅コースは入山口に至る林道が除雪されておらず変更せざるを得ない。この時点ですでに10時過ぎでありとても登山開始できる時間ではない。わざわざ秋田までこんな山の麓まで来て登らずに帰るわけには行かない。そこで祓川コースに向けて車を走らせる。何やらスキー大会のようで登山口と思しきところは人と車でいっぱいである。とりあえず一寝入りしてこの日は大館まで行って晩飯を食う。鳥海山のてっぺんは雲の中でかなり風も強そうだ。翌日の好転を期待しつつ、スキー関係者の消えた駐車場に戻りビールを食らって寝る。

少々風が強いが最高の天気である。5時半起床、シールを張り付け6時過ぎには登り始める。回りの車はどうも登山客ではないようだ。何となく登り口にしては人気がないなあ、なんて思いながら黙々と登る。スキー大会の為に付けられたと思しきスノーモービルの跡をずっと登って行くと何と



鳥海山を登る

右手から登ってくる登山者がいるではないか。よくよく地図を見直してみると連中こそが蔵川コースからの登山者で、自分が登っているところは猿倉口からの一般的とはいえないルートだった。幸い特に変なルートをとる必要もなく合流できそうなので一安心する。むしろ滑走距離はこちらのほうが長く取れそうだ（勿論登りも長いが）それにしてもやたら広大な斜面である。意外に地形は遠目より複雑で、例えて言うならば富士山の斜面だろうか、山頂が近そうな割には全く近づかない。氷の薬師を過ぎると風が強くなり、何度も風にあおられてひっくり返った。斜面も急になったのでアイゼンを付けてスキーを背負う。日頃の運動不足がたたってやたら息が切れる。しかも両踵が靴擦れになったようでひどく痛む。後続の登山者のどんどん抜かれるという、ひと昔では考えられなかった現実に愕然とする。それでも何とか頂上にたどり着いた。風を避けて渴いた喉にビールを流し込む。結構寒いし日も陰って天候悪化の兆しが見える。七高山の山頂を踏んで下山とする。新山が最高峰なのだがアプローチも悪そうなので登る気は起きなかった。

最初の斜面は40度近い急斜面でウインド

猿倉口(6:10) - 氷の薬師(9:50) -
七高山山頂(11:20~45) - 猿倉口(12:15)

(中居 記)

クラストしており慎重に下る。何といっても丸1年ぶりのスキーだ。感覚を取り戻すまでゆっくり斜滑降とキックターンで高度を下げ、落ち着いたところで飛び込むようにジャンプターンで切り替える。かなり引かかる雪質であまり滑りを楽しむというわけにはいかない。それでも氷の薬師を過ぎれば全開のウェーデルンでぶっ飛ばす。ショートカットからロングのバラまで自由自在。滑り出してしまうと沢山いたような登山者も気にならない。自分だけのグレンデだ。こんな雄大な斜面は、登った時間をもったなどといわず一気に滑るのが最も贅沢な滑り方だ。最後はスキー大会の跡を直滑降でしめくり、久しぶりの山スキーを終わりにする。天気にも恵まれたし、単独行というのがちょっともったいないが良い休日を過ごす事ができた。温泉も一人だと億劫なのでそのまま車を飛ばし、連休の中日でたいして渋滞にも巻き込まれることなく北茨城に帰り着いた。



鳥海山山頂付近にて…中居

御神楽岳 水晶尾根

1996. 5. 19.

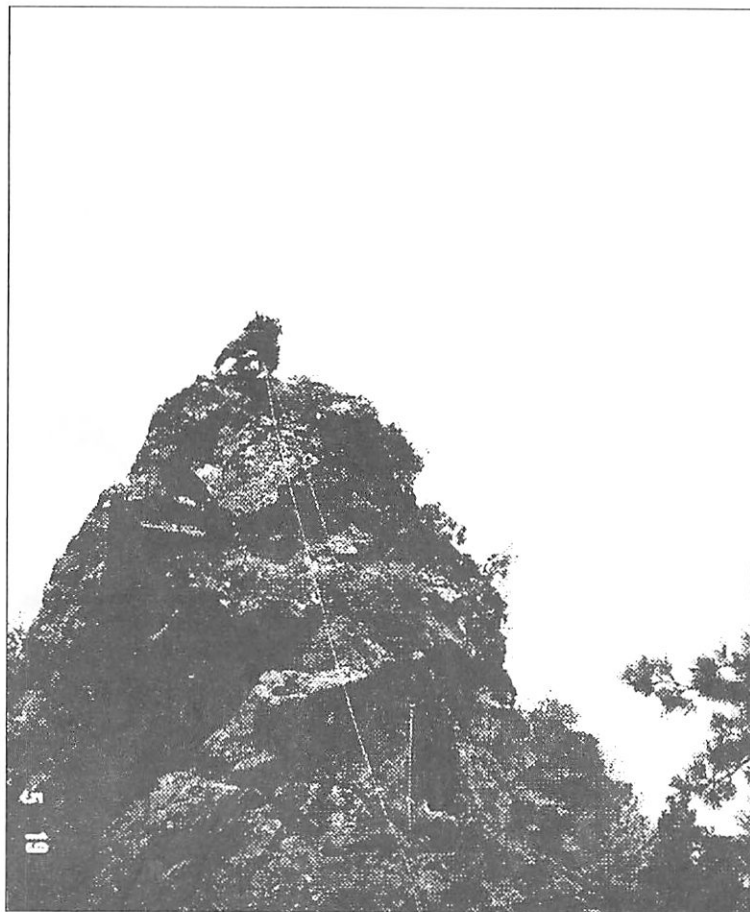
パーティ L 古山正文、本図一統、告弘道

前回遠くに(利尻山)に行ったせいか、近くの山なので何となくバカにしていると言うかナメていると言うか、装備を揃えるとき「このぐらゐの山ならこれは要らないだろう。」と軽みている。3人の中で共装を抜けば、一番荷物が少なかっただろう。今回何もなかったからいいようなもの、基本は忘れずにと家に帰ってから思った。

御神楽岳へ向かう道中、本図氏が携帯電話を買ったのでその話をする。自分も欲しいが仕事は家でしてるし、かかってきそうもないので諦める。深夜登山道入口に着き軽く酒を飲み寝る。翌朝起きてみるとたくさん車が止まっていた。山菜採りである。続々来ておじちゃんおばちゃんが山に入っていく。この辺りではよくゼンマイが採れるらしい。半分寝たまま歩いていると湯沢出合に着いた。テントを張っている人が出てきたので話を聞いてみると、今年は雪が多く山の上部にはかなり雪が残っているらしい。

わなないように予備を持たないようにするが、いつも吸いたくなって本図氏にもらってばかりいる。今回もだいぶもらってしまい悪いことをしました。湯沢の頭に着き終了。藪漕ぎが多くて結構疲れたが、両わきが切れているので雪があるときはすばらしいルートになるだろう。帰りは一般ルートを下るがこれが結構歩きづらい。古山氏は下る途中で膝を痛めてしまった。下りも結構長く途中休憩しようとしたが運悪く今度は本図氏の水筒の蓋がズレて水が無くなっていた。古山氏も私もすっかり水筒が空だったので沢まで我慢して歩き通す。沢に着くと朝とは違って、水がすっかり濁っていて気が引けたが構わず飲んでしまった。湯沢出合から車まで改めて山菜を探すが見つからなかった。麓の温泉にはいるが、ひさびさに長距離歩いたので足がマ

ブロック雪崩が恐いので予定の正面スラブではなく水晶尾根にルートを変更した。尾根の取り付きはもう少し広谷川を遡った方で川沿いに歩いて行くが、雪のおかげで一度も水につからずに渡って行けた。本名穴沢を少し登ったところから左の尾根に取り付く、岩が湿っていて滑りそうで恐い。尾根上に着いてやばそうなところでザイルを出す。がトップをやれと言ってくれるのが嬉しい。このルートはその名の通り所々で水晶が出ている。少しでも大きな水晶が欲しくて探せばかりいて山登りに来たのか水晶探しに来たのかわからなくなる始末。自分もいくつか拾ったがいつの間にかポケットから落ちていた。本日晴天で、暑くて水をよく飲む。しかし運が悪いことに古山氏の水筒の蓋がちゃんと閉まっていなくて水がみんな漏れていた。私はいつも山に行くときはタバコを余り吸



水晶尾根の登攀

メだらけで湯船に浸かれなかった。売店で山菜の瓶詰を買って帰路に着いた。

5/18

下館(21:00)ー登山口(0:45)

5/19

登山口(4:30)ー湯沢出合(5:30)ー末端取り付き
(6:43)ー湯沢の頭(12:11)ー湯沢出合(14:30)ー
登山口(15:40)

(告 記)

平成8年度第1回岳連遭難救助訓練

1996.5.25.

パーティ L 古山正文、坂本昭裕、笹平孝、今井弘

向陽台に9時半に笹平君と私が着いた。すでに、古山さんと坂本さん達は着いていた。参加者は19名で開会式の後2班に分かれた。1班の班長は水戸山の会の白石忠男氏がなられた。ACC-Jのメンバーは1班に加わった。始めに直径5cm長さ3m程の木を切り、ブルーシートの上に平行におき、シートを折り返しただけの担架を作製した。人を乗せるとブルーシートがズレて落ちるのではと思ったが、以外にズレはなかった。いつもの岩場には12時頃に着いた。昼食の後、ほとんど忘れていたカラビナを使ったイタリアンヒッチ下降、途中で止める訓練、エイト環を使った下降、途中でエイト環に巻つけて止める訓練をした。次に、岩場での遭難者の下ろし方訓練をした。サラシ10mを半分に折り、遭難者を救助者が赤ちゃんをおんぶする要領で縛って、下降した。救助さ

れる方も助ける方も何度やっても恐い。また、変形8の字結びをしてロープの先端を遭難者と救助者のハーネスに付け、第三者がエイト環を使い下降する訓練をした。この方法はロープがキンクするので4名は必要である。サラシで縛って下降する方法は2名もしくは遭難者にロープを結んで確保すると3名で済むようだ。3時半に担架を使い遭難者の搬送訓練をして4時半に向陽台に着いた。当日好天に恵まれて、朝向陽台に着いたとき、訓練ではもったいないような気がした。しかし、ブルーシートを使った担架と、忘れていたイタリアンヒッチ下降と途中で止める方法、エイト環で下降途中で止める方法、岩場での遭難者の下ろし方など参考になり充実した1日でした。

(今井 記)



叶津川（赤崩沢）

1996. 5. 25～26

パーティ L本図一統、菊池光夫、他水戸葵山岳会4名、浦和浪漫山岳会7名

今回の山行は、5月の連休後に本図氏より5月最後の土、日で、浦和浪漫の高桑氏の企画する山行で、叶津川最奥の赤崩沢という場所であった。正直言って地理的な場所も何もかも白紙状態であったが本図氏に情報を聞くと只見川沿いの蒲生駅の方との事で、詳しい地図を手書きで高桑氏がFAXで本図氏に送られてきたので、夜道でもなんとか現地に集合することが出来た。

道は川沿いの細い暗夜の橋の、ともに夜の2時に集合で少々早く着いたが、今回のメンバーである水戸葵の武藤氏、他3名合わせて6名である。

武藤氏、根本氏とは、丁度1年前の室谷部落より入った早出川以来であった。前回同様今回も大量の日本酒を葵のグループは持ってきた。待つ事30分位で高桑氏のハイエースが着き、浪漫メンバー6人と高崎より1名で現着した高橋氏、総勢13名のメンバーでハイエースに乗り込み酒を飲む。飲んでいるうちに、車の外は薄明るくなって

きたので、車に戻り仮眠する。

赤崩沢は、浪漫のある意味では秘密の場所なのである。これには、たぶん去年の盆に黒部の大滝へ行った高桑氏から本図氏への友情のお返しであろう。赤崩沢への案内であったのではないかと後になって自分で納得した。

朝、8時頃準備をして林道より歩き初めて、道は、ゼンマイ道になり途中天ぶらにするウドやコゴミ、コシアブラの山菜を採りながら黙々と歩く。木ノ根沢を越え、二俣となり、ここで冷やしうどんを昼飯に食う。これより、急なブナ林の急登であった。ブナの木は、一定の間隔を置き点々と繁っている。新緑の薄き緑色で白い雪と5月の真っ青な空が旨く調和して、私の後ろを登っている本図氏が放心したように『ああ～、綺麗だな～』とつぶやいたのが私の耳に入ってきた。やっとの思いで峠を越し、今度はブッシュ混じりの急な斜面を下ると、沢筋に出た。早速竿を出し、振りなが

らイワナを狙ってみた。私には当たりがなかったが、浪漫の佐藤氏や高桑氏はそれぞれ何匹か釣っていた。沢筋を少し歩くと部外者厳禁の場所があった。広川原みたいな盆地状の平らな雪面だった。そこには、1軒高桑小屋があったが、長い冬を越し雪が多いため部々の骨組みが痛んでいたもので、回りの除雪をして骨組みを直しシートを張ると立派な小屋が出来上がった。小屋の入り口には土間を作り夕飯の支度をする。葵のパーティが釣りに出ており釣ったのは1匹で骨酒用に焼いてもらう。その後は途中で採って切った山菜、コシアブラ、ウド、タラの芽の天ぶらにコゴミのおひたしで仲良く、酒を酌みかわした。

翌日は、早朝より葵のパーティは釣りに出て、浪漫の元気のある人はパーティを組み近くの沢に。早朝は水量も少なく雪解け水も少なく、葵のパーティが朝食までに間に合い、3匹釣ってきたので一番大きいものを刺身にして、残りはイワナ汁で朝食を取る。

そして浪漫のパーティが戻ってきたので下山の準備をする。途中お土産用の山菜を摘みながら車へ戻る。

（菊池 記）



ミヤマアザミ

岩登り講習会

1996. 5. 25~26

パーティ 今村宏

ACC-J 茨城に入って、早いもので1ヵ月になる。ほんの一週間前に、1ヶ月分の給料をはたいて道具をそろえたばかりで、カラビナには値札が着いたままだった。今まで、山には何度も登っているが、岩登りをするのは今回は初めてで、『もし落ちたら……』と言った不安で一杯だった。

岩登り講習会は、日立市もとやまキャンプ場とお岩山で行なわれた。初日は夜に、道具の説明とロープの結ぶ方についての講習があった。8の字結び、インクノット、プーリン、ダブルフィッシャーマンなどを教えてもらったが、三日後にはほとんど忘れてしまった。初日の講習会も終わり、もう寝ようかと思っていたら、古山さんがお酒を持って来ていて、前日、会社の飲み会が有り二日酔いで気持ちが悪かったが、また飲んでしまい、更に気持ち悪くなってしまった。

二日目は、近くの御岩山で実技の講習があった。最初は、かなり緩やかな岩場で基本的な登り方やグリップ、セルフビレーの練習をした。しばらく練習をした後、急な岩場に移ったが、そこは上から見ても、下から見ても、恐かった。そこで、初

めて懸垂下降をやったが、テンションをかけると、ザイルがビヨーンと伸び、切れるかと思った。また、体が横に揺られてしまい、近くを登っていた人を踏みそうになった。降りた直後は、ザイルを握り締めていたせいで握力がほとんど無くなっていて、カラビナの安全環を外すことが出来ないほどだった。最後に壁のような岩場を登るのに挑戦したが、本当に手の置場も、足の置場もなく、登ることも、降りることも出来なくなり、何とか登り切ることが出来た。

今回、初めて岩登りをやったが、今までだったら、とても登れるとは思えないところを登ることが出来、本当に嬉しかったし、岩登りは思っていたよりも安全なものだと思った。しかし、やっぱり恐かった。

(今村 記)

ガイド モンブラン初登頂
者ジャック・バルマとバト
ロンのド・フシユールの銅
像はガイドの出しゃきに
立つ



奥秩父 大洞川 和名倉沢

1996. 6. 2.

パーティ L古山正文、本図一統、新美達也、紺野哲雄

最近、会報の原稿の取り立て人が優しいN編集長から鬼のMさんに代わった。この原稿も帰りの車の中で書くように言われた。この分だと、『会報に載せる原稿が欲しいから来週〇〇ルートを登ってこい』などと指定山行に発展してしまうのではないかと内心ビクビクしている。山行の為の会報か？、会報の為の山行か？、それが問題だ！。

沢登りルート図集「東京付近の沢」は、行く先を決めるのによく使う。それにはインタレストグレード（興味度）が付いていて、遡行の面白さが三段階（星2つ、星1つ、星なし）に分かれて付いている。この本に載っている123沢の中で、星2つの激賞されている沢は14沢で、星1つの推奨されている沢は42沢である。最近星1つの沢へ行くことが多くなっているが、当り外れが大きい。今回の沢は星1つ、さてどうであろうか。

下妻に集合し、秩父に向かう。途中、

中で大休止を取り、その時本図さんが釣竿をだすが釣れなかった。魚がいないのであろう。うっかりコケて前歯を欠かした以外は問題となることはなく、

（それこそが問題か？）二瀬尾根に出た。荷物をデポして和名倉山をピストンする。山頂は樹林の中の10畳程の広場で、展望は全く無い。古い標識と三角点がなければ山頂とは判らないであろう。下りの尾根道はそんなに悪くもなく、標識のテープが多く付けてあった。途中から背丈をこす笹の森のなかの人が一人やっと通れる位の幅の急な道を下る。1時間程で小屋跡に着き、ここから1時間程笹の森の中のトロッコ軌道跡らしい道を進み、マイクロ回線の反射板の所に出る。ここから再び急な尾根の下りとなる。なんとなく下るペースが全員上がらないと思ったら、膝が痛くなったとか、軽い肉離れになったとか、爪先が靴に当たっていたとか、全員全く目も当てられない状態であった。これで本当に山屋なのだろう

車内から本図さんの携帯電話で生井留守隊長に連絡をする。全く便利だ。秩父警察署に新しい書式の登山届を提出して、秩父湖（二瀬ダム）に着く。

（この辺りは秩父中古生層といって古生代と中生代の地質が入り交じっていて、日本列島形成を知るための重要な地質で有名であるらしい。）

道路は三峰山へ向かう道で、深夜タイヤをきしませて急カーブの山道を行ったり来たりしているなんとか族がうようよいるので、静かなところに退避して駐車した。

翌朝、入渓点近くまで車で移動し、車道から斜面を下って橋を渡り作業道をしばらく進んでから沢に下りる。どの石もヌルヌルして普通の沢よりも滑りやすい。またゴミも目につく。基本的には滝はすべて高巻であるが高巻自身も悪くない。途



和名倉沢を登る

か。それでも1時間程でダムに着いた。一番元気な紺野君が車を取りに行ってくれた。帰りは大滝の温泉に入りたかったが、営業は終わっていて、仕方なく秩父で夕食を取って帰った。

6/2 出発(6:00) - 入渓(6:20) -
二瀬尾根(13:00) - 和名倉山ピストン1
時間 - 二瀬ダム(17:00)

(古山 記)

6/1 下妻(21:30) - 二瀬ダム(0:30)

荒沢岳・前衛スラブ

1996. 6. 9

パーティ L本図一統、笹沢ひろみ

シトシトと冷たい雨が降っている。いつもと同じ市役所のパーキングに21時集合。集まったみんなは戸惑った様子で自分の車からザックを出そうとしない。そんな中、一人だけはりきっているのは本図さんだけだ。『今年はツイテルんだ』と自画自賛し本図さんの意見で出発となる。

今回のスラブ登りのメンバーは、本図さん、古山さん、坂本さん、紺野さん、笹沢の5名だ。紺野さんとは初めてだ。

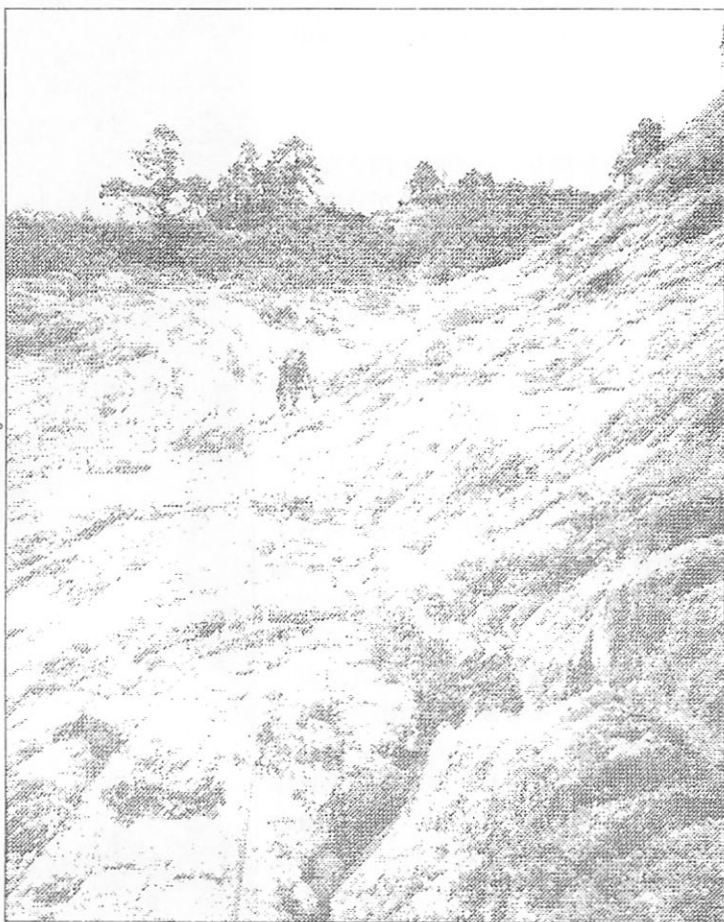
翌朝、みんな心配とは裏腹にまずまずの天気。『やっぱり今年はついているなあ〜』と約1名ニコニコ顔である。支度をととのえ5時25分出発。沢沿いの薄暗

いじめじめした道を進む。その後は沢登りのような感じで沢を詰め、雪溪の上を行く。まるでスイカをスプーンでほじくったような雪溪はひんやりして気持ち良く、目の前の荒々しいスラブはかっこいい。

私は本図さんと前衛スラブを登る。風穴スラブのパーティの3名とは一時お別れ。登攀前に今回の恵みである。「コシアブラ」の新芽を戴き6時30分登攀開始。つるべで6ピッチぐらい？なかなか快適でフラットソールの久々の感覚が嬉しい。

最初は余裕で結構細かいスタンスを選んで登ったり楽しんでた。が6ピッチ目以上では岩が脆くなっていたり、子砂利がいっぱい着いてたり滑りやすいやらしい。トップは普通の靴の本図さんにまかせ3ピッチぐらいで終了。その後シャクナゲなどの木々の中を藪こぎし、やっと稜線へ抜けた。風穴スラブのパーティはとっとと稜線に出たらしいく大変おまたせしてしまった。(何で時間がかかってしまったんでしょうか)

下山ルートは、稜線の途中からノーザイルで木や草を掴みながらつるつるしながら下った。これが今回一番泣きが入った。夢中で良く覚えてないが、とにかく恐かった。そして雪溪の上に出た。急斜面で初めて付けた軽アイゼンでへっぴり腰になって降りてきた。何処らへんに体重をかけたら良いのか



前衛スラブをリードする笹沢

分からないし歩いているうちになんだか緩んできてしまっ、とにかく一步一步慎重に下ってきた。やっと朝登ってきた緩やかな雪溪に合流、やっと緊張感が解ける。春ゼミの鳴く心地良い日差しの中、満足感とコシアブラをお土産に帰りました。

駐車場(5:25) - 取り付き(6:33) - 終了(9:52) -
尾根(10:18) - 駐車場(13:14)

(笹沢 記)

荒沢岳・風穴スラブ

1996.6.9.

パーティ L古山正文、紺野哲雄、坂本昭裕

予報では雨、しかも今年雨男の坂本がからんでいとなると事態は最悪である。しかし、今年になって一度も雨敗退の無いという本図さん。曰く『大丈夫だっべ、せっかくだから行ってみっべ』ということで出発した。50号は、時折激しく降ってきたりで、幸先が悪い。本図さんは、長年の経験から、関越トンネルを境に天候が異なる事を強調され、新潟側が雨なら諦めようとのことであった。17号のお馴染みのセブンイレブンでは雨なのに、湯沢側は晴れであった。さすが晴れ男。雨男の今後はこの強運にあやかることが出来そうである。

山行は、前衛スラブ組(本図、笹沢)と風穴スラブ組(古山、紺野、坂本)に分かれた。翌朝2パーティー一緒に出発した。5:30過ぎであった。風穴スラブは足拍子川本谷沿って上流に進む。雪

溪が多い時期は比較的取り付きまでは短時間で行けそうである。登山大系には、雪溪が無くなると本谷がゴルジュなので簡単に取り付けけないと書いてあった。確かに雪が無いときは、溪流シューズが必要そうな場所であった。

30分ぐらいで前手沢出合に到着した。前衛スラブ組とはこの先で分かれ本谷を上流に進んだ。今年は残雪が多く風穴スラブに取り付くのは容易であった。60m階段状スラブまで難なく登ることが出来た。二俣の手前で登攀用具を準備した。5ピッチでトマノ風穴であった。そこまでホールドもしっかりしており快適であった。風穴付近はボロボロで落石が頻発した。風穴は左から廻り込んで、凹角状を2ピッチで登攀終了となった。9:30過ぎであった。そこから主稜線までは10分ぐらいであった。主稜線を少し下って、前衛ス



前手沢を下降する

ラブ組を待った。予報では雨のはずであったが、青空が広がっていた。巻機山の方まで見渡す事が出来た。

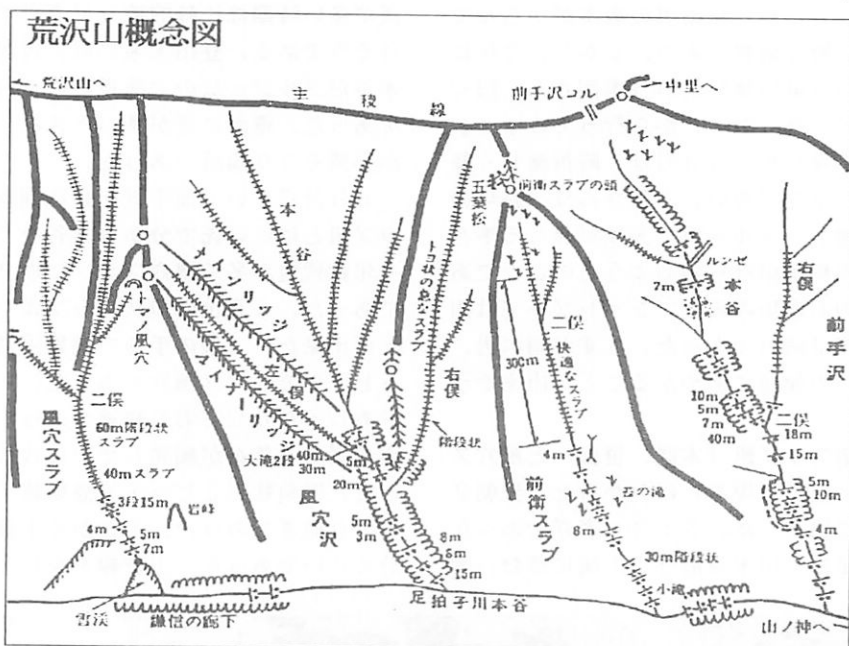
合流後、稜線上で軽く食事をし、前手沢の科尔から下った。降り口付近が落石の危険が有り一人づつ下った。途中懸垂も必要であった。足拍子本谷出合まで、小一時間くらいかかった。さて、これからは山菜採りが始まった。本図さんの目は輝いていた。コシアブラと言う一見タラにも似た山菜である。言い方は悪いが一本の木についている新芽は根こそぎ戴いた。もちろん僕も協力した。山の幸に感謝である。おひたし、あるいは天ぷら

が旨いそうである。ほかの山菜はまだ早いようである。ゼンマイなどまだ細かく小さかった。やはり雪解けが遅れているせいだろうか。

結局13:00過ぎに駐車場に着いた。その後、湯沢のお風呂に入って汗を流し帰路に着いた。

出発(5:30)ー前手沢出合(6:00)ー風穴スラブ取り付き(6:30)ートマノ風穴(8:15)ー主稜線(9:30)ー前手沢の科尔(11:00)ー足拍子川本谷出合(12:00)ー駐車場(13:00)

(坂本 記)



谷川岳北面檜又谷大スラブ

1996. 6. 16

パーティ L本図一統、新美達也

黒金沢の出合の広場は車で一杯でした。最近はどうな山奥でも、道があるところには車が入っているのです。やはりアウトドアブームなのでしょう。身支度を整え、蓬沢を渡ろうとしますが橋がないのです。古い資料によると橋があるはずなのですが、裸足になり徒渉しました。いやあ冷たいのなんのって、すっかり眠気が覚めました。対岸にも道はありませんで、おかしいなと頭をひねりながら50mもヤブをこぎますと立派な橋があったのです。橋はほんの少し下流にあったのです。檜又沢中流に至る左岸の道もかすかなもので、しかも沢芯からあまりに離れてしまうので不安に

なり、遡行することにしたのです。ところが運動靴ですので、とても歩きにくく時間がかかります。又ヤブコギして元の道に戻りましたが、それもすぐなくなり再び沢に降りました。雪渓に埋まった沢を詰めると右岸に大スラブが確認できました。更に私達は登り続けました。実は今日の予定は小スラブなのです。小スラブと思われる谷の前に立ったとき、アレツ変ダナと思いました。スラブにしては谷の形状がゴルジュ状に見える。谷は深く雪渓がたくさんあり、とても登れそうになかったのです。スラブに遅くまで雪渓が残るはずがありません。でもここまでに小スラブらしきものはあ

りませんでした。私は頭の中が???で一杯になってしまったのです。上部にブロックがあり危険なので大スラブに変更することにしたのです。大スラブは容易でノーザイルで各自自由にルートを選びながら登って行けます。今ここにあらためて報告するような箇所もありませんでした。登攀というよりも岩の散歩道といったほうがピッタリするような快適なスラブでした。と言ってもスリップは許されません。スリップして五体満足で帰ることはできないからです。右の尾根に出て唖然としました。先程小スラブと思った沢はススケ沢だったのです。沢の形状からしてススケ沢には納得しましたが、それでは小スラブはどこにいったんでしょう。探して見るとありましたよ、ありました。ススケ沢の少し下流からスラブが上がって来ているのがね。本谷からスラブは確認できなかったのです。本谷の雪渓が多くて出合が確認できなかったのです。私達はなんというドジなんでしょう。でも檜又谷は初めてで、何処でもいいという考えがありましたので、悔しいという気持はありませんでした。次に登ればいいのです。本谷対岸の大滝沢は悪そうで、一度アタックしてもいいかも知れません。それとススケ沢と滝沢が気になった位で、他は登るほどの価値はないように感じました。武能岳北峰に出て一休みしながら茂倉岳の方を眺めると、頂上に指導標が一人寂し

くボツンと立っていました。私は谷川連峰には百数十回も通っているのに、武能岳にも茂倉岳にも登ったことがないのです。今までなんという偏った登山をしてきたんだろうと思わざるを得ませんでした。3百名山をやっている東京のN氏とM氏の顔がチラッと脳裏を過りました。蓬峠に着くころ昔の事を思い出していました。勿論独身のころでしたが、清水峠から蓬峠まで女性とツーショットで歩いたことがあったのです。初冬の頃の時期だったと思います。霜柱をサクサクと踏みながら、いろいろなことを語り合いました。あの茶目っ気たっぷりの彼女は今3人の子持ちで頑張っているようです。

蓬ヒュッテの前で弁当を食べていると、小屋のご主人が出て来て、洗濯物を取り込みながら「雨が来るよ～」と教えてくれました。さすが予想はピッタリで30分後には本当に降ってきました。下りはコシアブラを採りながら、途中ちょっと糸を垂らしてみましたがアタリはぜんぜんありませんでした。

黒金沢出合(5:05)－大スラブ取り付け(7:27~7:40)－大スラブの頭(9:45)－武能岳西尾根2の沢の頭(9:54~10:17)－国境稜線武能岳北峰(10:37~10:50)－蓬峠(11:07~11:17)－黒金沢出合(13:47)

(本図 記)



大スラブを上部を登る本図

谷川岳・一の倉沢

衝立岩ダイレクト・カンテ

1996. 6. 16

パーティ L 古山正文、中居康展

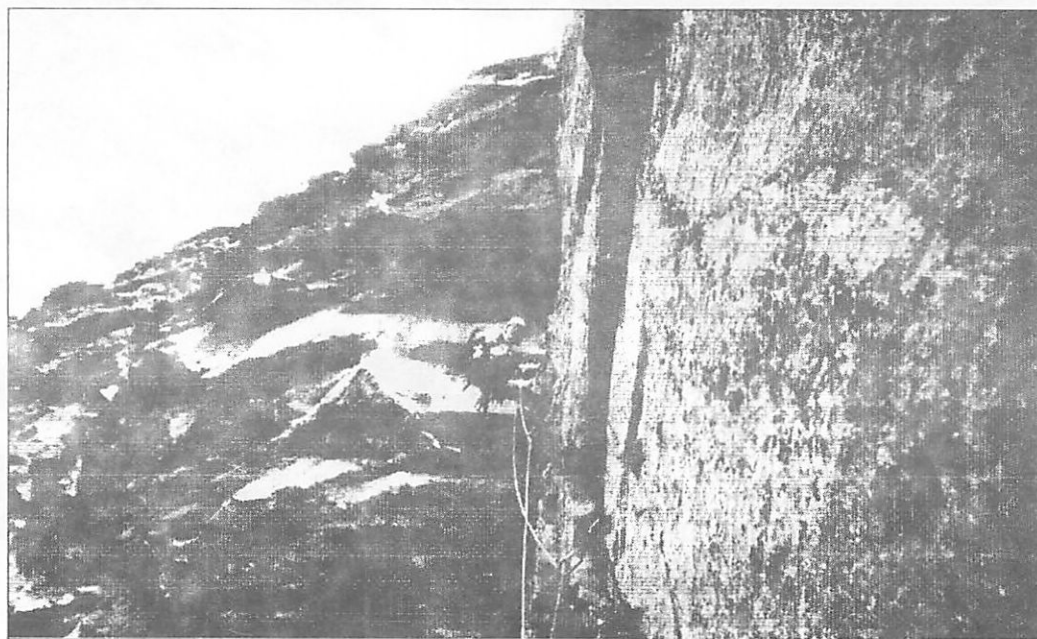
今月の休みは一の倉にしよう。古山さんを例のごとく誘って前日夜8時に下館に集合する。例年通りならテールリッジまで雪がついていて楽にとりつけるはず。この時期は特に日も長く、天候にさえ恵まれれば登攀には最高の季節である。登山指導センターに計画書を出すと、どうやら目標のダイレクト・カンテにはもうワン・パーティ取り付くようだ。一の倉沢出合まで車を進めると、大量の残雪が駐車場まで埋めていた。思ったより車が少なく、雪が多いせいか虫もいない。適当にテントを張って小宴会して寝る。

さすがにこの時期は朝が早い。4時過ぎには明るくなるのでいそいそとテントをまとめ出発の準備をする。久しぶりの衝立岩がやけに大きく見える。昨夜の冷やうどんが胃の中に残って食欲はない。雪溪の上を冷たい様な生暖かい様な変な空気が流れる。いつも通りのテールリッジ。先行のパーティは出発が遅かった割には少ない。先行のパーティは岳樺アルパインクラブの二人である。先行パーティが取り付けに向かうのを見ていたがどうやらよく分からないようだ。後から見ているも少し藪をこいでアンザイレントラスに行く所なのだが、先行を見てもらちがあかないので我

々も出発する。1ピッチザイルを出したが特に問題なくアンザイレントラスに達する。15メートル懸垂して取り付けである。

最初の1ピッチ目を引かせてもらう。右上して凹角を登る。ザイルの流れが悪くテラスの前でピッチを切らざるを得ない。古山さんが2ピッチ目のA2を登る。剥がれそうな岩があったり、切れそうなシュリングがぶら下がっていたりで登られている割には不安定な支点が多いようだ。先ほどの先行パーティも後を追ってテラスに登ってきた。後続がつかえているようだが先に登ったほうが勝ちだ。3ピッチ目は自分がトップを引かせてもらう。3メートル毎にベツルが打っており結構安心してリードできるが日頃の運動不足がたたって腕力がない。2、3回フィフィが決まらず落っこちそうになる。来る度に思うが何でこんな思いをしにやってくるのだろう。しびれを切らした後続パーティは隣の雲稜第2を登り始めた。天気が良いのもかえって災いして、思いっきり脱水状態である。あぶみにぶら下がってポリタンの水を飲む。

カンテを回り込んで最後の4級A1に移る。人工になれ切った身体には恐ろしいの一言。ハーケ



ダイレクトカンテ核心を登る…古山

ン、ボルトはほとんどべた打ちと言っていいくらいだがトラバースでなおかつ下はすっぱり切れ落ちている。必死の思いで終了点の灌木にしがみついてダイレクト・カンテは終わった。

北稜を3回懸垂で略奪点に達し、良く冷えた沢の水を腹一杯に飲む。だいぶ生き返った。衝立前沢は雪渓がびっちり残っていて悪い。結構気を使わせられる下りで、一の倉はまさに駐車場に着くまで気が抜けない。泥だらけになって駐車場にたどり着いた。帰りは湯テルメに使って一汗を流す。本図さんの携帯に電話をかけると丁度渋川伊香保の辺りにいるから緊急集合、ということでぶっ飛ばし合流。晩ご飯など一緒に食いながら下館に帰り着く。ところで今回の一の倉にはまだまだドラマが残っていた。何とダイレクトカンテの後続の

2人があの後下降の途中で遭難したということだ。こればかりは意外な展開というしかないか、それともやはり一の倉には魔物がすんでいるのか。

岳樺アルパインクラブの両氏のご冥福をお祈りします。

一の倉沢出合(4:50)－中央稜基部(6:10)－
登攀開始(6:30)－終了(12:00)－出合(14:30)

(中居 記)



ダイレクトカンテ上部を登る…中居

梅雨の富士山

1996. 6. 26~27

パーティ 今井弘

午前2時、窓を開けるとシトシトと雨音がした。やっぱり雨かと思いながら出発準備をした。

高速道路を富士山に向かって車を走らせた。が、全く雨が上がる気配がなかった。富士山五号目まで行けば雨も上がるだろうと思いながら滝沢林道を走った。

五合目の佐藤小屋の下の車道に車を停めた。やっぱり雨。富士山を登っているうちに雲の上に出れば晴れるだろうと思いながら、7時に登り始める。

七合目、雨。八合目、雨。熱いよりましかと諦めた。山頂も雨。しかも風も強い。風の弱い場所にテントを設営して雨で冷えた手足をコンロで暖めた。まずはサントリー印の水割りとサバの缶詰めで一杯呑んだ。時計を見ると昼間の二時。することが無いので、シュラフに入りラジオを聞いて時間を潰した。夜は風がテントを叩く。音で一時間ごとに目が覚めた。

朝4時。明るくなったので、今日も駄目だろうとテントの出入り口のファスナーを開いた。外には見事な雲海が広がっていた。

4時30分。空と雲の間から太陽が富士山を赤く染めた。ビスケットとコーヒーで朝食をすませ、お鉢まわりをした。雪渓は少なく富士測候所の下に付いているだけだった。

7時40分。テントを撤収して山頂を後にした。各山小屋は7月1日の山開きの準備をしていた。

9時50分。五合目に停めた車に着いた。帰りに忍野八海の温泉で汗を流して自宅に15時30分に着いた。

五合目(7:00) - 山頂着(13:10) - 山頂発(7:40) - 五合目(9:50)

(今井 記)

○ B の近況報告

高田暢年

先日久し振りに本図さんから電話がかかってきた、なんでも会報に「○Bの近況報告」というのを載せるので原稿を書いて欲しいとの事。一昨年の12月に茨城県から山口県に引っ越してきてかれこれ1年半になりますが、特にこれといって報告することもないので、随分前ですが今年の3月に大山に行った時の事を書いてみたいと思います。

3月22日(金)宇部市内を20時頃出発。メンバーは現在私が所属している宇部山岳会の会員4名と山口県内にあるアルピナというフリークライミングの同人組織の人が1人と私の計6人。

宇部から大山寺まで距離にして約350Km、中国自動車道を山口の小郡から広島庄原まで乗って、後は国道をひたすら走る。こちらはスキーシーズンが短いのでこの時期になると道路はがらである。こちらも今年は例年に比べ雪が多いとの事だが、それでも4月になれば雪はどんどん

溶けてしまうとのこと。

大山寺の駐車場に1時頃到着。ガラガラの駐車場一番奥に車を止めテントを張り、早速酒盛りが始まる。その辺の習慣は西も、東も関係ないようだ。

3月23日(土)天気曇り 一番ポピュラーなルート、夏道コースから弥山(1711m)を目指す。このルートは春は新緑、秋は紅葉が大変きれいらしい。コースタイムは約3時間半、大山は西日本の山で唯一アイゼンを履く山である。今回初めてアイゼンを履く人もいたので、少し時間がかかったが特に問題もなく大山頂上小屋に着く。荷物を置き弥山の頂上で写真を撮る。ガスが出ており視界は全くない。ここから先の縦走路がやせ尾根で岩の崩壊が激しく夏はかなりの難所コースらしい。今回はパーティーの実力からしてここまでが限界である。頂上小屋でラーメンを作って食べ、登って来たルートを下る。時間が有ったので

途中手頃な斜面で滑落停止の訓練をしたりしながらゆっくりと下山した。テントに戻ると早速酒盛りが始まる。宇部山岳会では多人数でベースを張る場合の夕飯は米は炊かず酒と鍋だけだそうだ。烏鍋をつつきながら、久し振りにテントで飲む酒はやっぱり最高である。

3月24日(日) 天気晴れ。本日のルートは元谷から下宝珠越→中宝珠越→ユートピア小屋を目指す。昨日のルートと比べるとアップダウンのある尾根で、雪山初心者の多いパーティーには少々手強いルートである。しかし天気が良いので展望は良好である。北壁の屏風岩が素晴らしくそびえ立つ。アイスクライミングをしているパーティーも見える。最近では崩壊が激しいのであまり北壁に取り付く人は少ないらしい。途中トラバースで時間がかかるが、ユートピア小屋に着く。眼下に大山スキー場が見え、その先には米子の町と日本海が大きく広がって見える。三鈴峰(1516m)をピストンして来る。時間的にこれより先は無理なので、剣ヶ峰、天狗ヶ峰は次の楽しみとして今回はここより引き返す事にする。行者谷をスキー

で滑ってる人達もいる。まだまだこれから色々楽しめそうな山である。

駐車場に戻りラーメンを作り食べていると突然雨が降ってきた。早々に荷物を片付け車に乗り込み宇部の町に帰る。

以上のような感じで、こちらに来てそれなりに山に登っております。茨城にいたときほど回数には行かなくなりましたが、今後も自分の器に合った範囲で続けて行こうと思っています。現在は宇部山岳会の会員ですが、私の岩登りの原点はACC-J茨城であり又本図さんであるのです。又いつかACC-J茨城の人達と一緒に山に登れる事を楽しみにしています。それまでにこちらの沢、岩場等をよく登っておきますので、こちらに遠征してください。

(高田 記)



大山・弥山のピークにて

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO.132 1996.4 B5 30P 浦和浪漫山岳会

室谷~今早出沢~ヤジロ尾根~下矢筈岳~魚止山~室谷、阿能川岳北東尾根~南東尾根、尾ヶ禿山、家向山、仙ノ倉山北尾根中退ほか

◎Rohman NO.133.1996.5 B5 72P 浦和浪漫山岳会

春合宿特集・白根山~青里岳~矢筈岳~三川分水峰、毛石山~灰ヶ岳~青里岳~矢筈岳~三川分水峰、光明山~毛無山~駒形山~三川分水峰、光明山~毛無山~東又沢~三川分水峰、魚止山~三川分水峰 マンスリーレポート・鍋倉山、岩岳~蒜場山~小面峰、檜倉山西尾根中退、頸城・三田原山、上越・赤沢山、谷川岳西黒尾根ほか

◎Rohman NO.134.1996.6 B5 48P 浦和浪漫山岳会

第13回OB山行・蒲生岳ピストン、八十里越え、小戸沢東ノ沢・檜ノ沢~丸山~西ノ沢スザス沢、男鹿山塊・大蛇尾川西俣~東俣、会越・蒲生川真奈川~赤崩峠~叶津川五枚沢、奥多摩・栗ノ木王沢、特別アンケート・今年どの溪に行きたいか?どの溪を予定しているか、川内・下田遊行ランクー覧、浦和浪漫山岳会OB会則ほか

◎月報・ZAC NO.176 1996.5 B5 22P グループ・ゼフィルス

奥利根・樽俣尾根、大清水~尾瀬ヶ原、鳥海山、月山、白馬岳・金山沢と大雪溪、南会津・檜枝岐~会津駒ヶ岳~三ツ岩岳~坪入山~山毛驢山~小立岩、小泉共司氏の再び奥利根への思い、とっておきに道路情報ほか

◎月報・ZAC NO.177 1996.6 B5 12P グループ・ゼフィルス

飯豊・入り門沢スキー&山菜、尾瀬・戸倉~富士見平~メッケ田代~山ノ鼻~柳田代、大清水~白尾山~鳩待峠~笠ヶ岳~湯の小屋温泉、鳩待峠~至仏山~ムジナ沢~メッケ田代~白尾山~大清水、大清水~尾瀬沼~幾ガ岳~御池、丹沢・勘七ノ沢ほか

◎わらじ NO.481 1996.4 B5 22P わらじの仲間

サブ合宿特集・高棚右稜~金城山、割石沢右稜~金城山、水無道~金城山、雲洞~金城山八合目、富士山、夕張岳ほか

◎わらじ NO.482 1996.5 B5 26P わらじの仲間

佐渡山山スキー、八海山・生金沢左稜、南暑寒岳ほか

◎わらじ NO.483 1996.6 B5 38P わらじの仲間

二王子岳~赤津山~門内岳、西俣ノ峰~大日岳~飯豊本山、大くら尾根~川入、鹿島槍~鰐岳、双六岳~薬師岳山スキー、屋久島・宮之浦川、レスキュー講習、確保訓練、早池峰山、やさしい磁北線の引き方(必見の価値あり)ほか

◎逍遙 NO.59 1996.4 B5 12P 逍遙溪稜会

頸城・三田原山山スキー、八ヶ岳・西岳~編笠山、奥多摩・盆掘川伝名沢右俣三郎の岩道登、荒沢八ヶ岳カドナミ尾根ほか

◎逍遙 NO.60 1996.5 B5 16P 逍遙溪稜会

丹沢・寄沢滝郷沢左俣、奥多摩・後山川三条沢、会津駒ヶ岳山スキー、上州武尊山スキー、丹沢・鳥屋待沢左俣、中川川モロクボ沢ほか

◎逍遙 NO.61 1996.6 B5 20P 逍遙溪稜会

奥秩父・大洞川荒沢谷、頸城・妙高国際スキー場~三田原山~火打山、丹沢・玄倉川ザンザ洞、大峰・戸廻瀬川、池郷川本谷、奥秩父・井戸沢、月山山スキー、上越・神楽峰山スキーほか

◎Next! No.4 1996.4 B5 28P 山岳溪流釣り集団むげん

北ア・黒薙川北又谷、古賀志山きのこ山行、みちのり(仲間の近況報告)ほか

◎Next! No.5 1996.5 B5 28P 山岳溪流釣り集団むげん

奥多摩・つづら岩、丹沢・早戸川本間沢、円山木沢、鳥屋鐘沢、みちのりほか

◎Next! No.6 1996.6 B5 36P 山岳溪流釣り集団むげん

春合宿三峰川の報告が3本、ツヅラ岩RCT、奥秩父・大常木谷、会員の近況報告等ほか

◎とまのかげ No.41 1996.4 B5 11P 童人との風

霧ヶ峰・八島ヶ原湿原・蝶々深山・車山・沢渡スキー場、タカマタギ山・日白山、上州武尊山山スキーほか

◎とまのかげ No.42 1996.5 B5 24P 童人との風

平標山・仙ノ倉山山スキー、笛吹川東沢・甲武信岳、丹沢沢登り集中合宿・キュウハ沢、大欄沢、四町四反ノ沢ほか

◎とまのかげ No.43 1996.6 B5 29P 童人との風

雪訓レポート、丹沢・勘七の沢、飯豊・頼母木山、北ア・燕岳、岩場遭対訓練、前日光・大芦川藍平沢・本沢・ヒノキガアタ沢、鳥海山・鳥越川ほか

◎騒溪酔峽(さけすき) No.41 1996.4.5 B5 16P 騒溪酔峽山の会

上信越・笠法師山、平成七年度山行一覧、平成八年度山行計画、会員名簿ほか

◎山紫水明 No.1 1996.3 B5 20P 山旅の会

山旅の会再結成に向けて、真昼山地・袖川沢、奥秩父・樺谷・荒沢谷、奥多摩・水根沢、広沢寺RCT、仙ノ倉西ゼン、笛吹川東沢釜の沢、南ア・甲斐駒ヶ岳、富士山雪上訓練、北上山地・姫神山、野猿谷IC、西丹沢・沖箱根ほか

◎山紫水明 No.2 1996.4 B5 10P 山旅の会

雪上訓練(マチガ沢)、特集・私の行きたい山と溪ほか

◎山紫水明 No.3 1996.5 B5 12P 山旅の会

太平山、日和田山RCTほか

◎通信・植村冒険館 NO.6 1996.4 B5 4P 植村記念財団

仲間が語る植村直己ほか

会報・記録集・報告書

◎野良犬通信 Vol.3 1996.5 B5 40P チーム野良犬

丹波・粟鹿山、台湾・濁口溪山花奴奴溪(中退)、加越・こまんど山、白山・口三方岳、三方崩山、北ア・柳又谷横断・朝日岳、白山・東戸倉谷・西戸倉谷、南紀・桐谷白見谷第一支流、白山・瀬波川オフクベ谷・マサギ谷、尾上郷川海上谷・カラス谷、奥秩父・小川山、裏木曾・付知川東股谷、白山牛首川・赤谷、別山谷、丸岡谷、越前・大納川和佐谷左俣、白山・蛇谷岩底谷・雄谷清水谷、尾上郷川サブ谷・モミクラ谷、庄川横谷、牛首川大杉谷ハチブセ・ナナコバ谷、加越・北丈親山北面のスラブほか

◎富士登山事故報告 1996.8 A4 9P 茨城県高体連

中西和雄氏の滑落事故の経過と原因分析

以上閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

突然、天空に暗雲が広がり、何処からか呪文を唱える声をする……………。

『ブーレイ、ブーレイ、インディード、血の盟約に従いアバドンの地より来たれ！
ゲヘナの火よ！爆炎となり全てを焼き尽くせ！エグゾーダス！』と、古の呪文の声…。
次の瞬間、雷鳴とともに姿を現したのは、そう、待望の魔道士“M”。

魔道士“M”の復活である。魔界最強の彼の力を借り、今ここに新生「R&V」が
装いも新たに誕生したのである。これから新たなる「R&V」の就航です。

これからは、待望の魔道士“M” & “超美形MPU編集長等によって「R&V」
もバージョンアップしていくはずです。

締め切りに間に合わない常習者も魔道士“M”の魔力によって抹消されるでしょう。

これからの魔道士“M” & “超美形MPU編集長の活躍に、諸君、期待あれ！

(編集長)



若かりし日の魔道士“M”

季報「R&V」第21号 発行1996年 春

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城

〒306-005茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男方

編集者：生井一男

印刷所：やさと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団